

## 国際ワークショップ

## 「慰安婦」問題とアジア女性基金の償い事業

基金は重要な一歩を踏み出した。

ほかにもやりかたがあったのかもしれない。

全てが満足いくものだったとはいえないが、大きな意味があった。

ワークショップの発言より

2003年2月7日から9日まで箱根において「『慰安婦』問題とアジア女性基金の償い事業」をテーマにワークショップを開催しました。参加者はさまざまな立場、意見をもった方々で、「慰安婦」問題とはなにか、基金が成し遂げられたもの、成し遂げられなかったもの、行すべきだったこと、行っていくべきことなど、いろいろな角度から「慰安婦」問題と基金の「償い事業」について議論、検証を行いました。

「基金は広報が下手である。募金者がどのような気持ちで基金に募金をし、それを被害者がどのような気持ちで受け取ったのかも知らせるべきであったし、これからでも知らせるべきである。」「さまざまな批判がある中、究極の選択をし、基金を受け取った被害者もいる。被害者の心の平安のために、正当性のために、もっと基金の活動を説明していくべきである。」「基金が将来、(過去の『慰安婦』問題とつながっている)女性に対する暴力の問題に取り組んでいくのであれば、広いネットワークをもつアジアの女性たちと和解し、協力していくべきである。」など、これから基金が行っていくべき課題も提案されました。この結果は今後、報告書として出版される予定です。



## 参加者

リー・ウォン・ウォン(韓国・関東大学)、  
ハリマ・ワルザジ(モロッコ・国連人権保護促進小委員会委員)、  
サラ・ソウ(アメリカ・サン・フランシスコ州立大学)、  
クリフォード・チャニン(アメリカ・レガシプロジェクト)、

上野千鶴子(東京大学)、田中明彦(東京大学)、  
田中利幸(広島平和研究所)、橋爪大三郎(東京工業大学)、  
有馬真喜子(理事)、大沼保昭(理事)、和田春樹(理事)、  
横田洋三(運審委員長)、伊勢桃代(専務理事・事務局長)、

## 第2部 討議：基調発言をめぐって

加藤 第2部をはじめたいと思います。

第1部の4人のパネリストの方々の発表を聞いて、その充実ぶりに静かな感動を覚えています。明治学院大学国際学部附属研究所現所長の竹内啓さんから、冒頭挨拶の形で、果たして9・11という出来事は、それほどエポック・メイキングな事件なのか、われわれはこの種の同時代的な大事件の受け取り方に慎重であるべきではないか、という問題提起がありました。もし、本当にこの出来事に画期的な意味があるとしたら、それは何で、どこからそのようなことが言えるのか。そういう点にも深く意を用いて、第2部の討議をすすめてゆきたいと思います。

まず4人の方の発表について、司会のほうで簡単に論点を要約・整理します。そして、いくつか質問を用意した上、それに答えていただく形で討議を進めていきたいと思っています。

今日の話は、社会学の関係の人と、(僕を含めて)専門が社会学ではない人との間で、話し方に、いろいろと違うところがあって、教えられました。時間を惜しむ話し方には、なかなか慣れられないのですが、ここでは、少し違った場所で物を考えている人間が、場を共有し、いわば「席を同じくしている」ことのメリットを生かすように、できるだけ僕は僕なりの話し方とトーンでお話ししてみたいと思います。

## 見田さんの「アポカリプス」について

まず、今、最後に見田さんから「アポカリプス—『関係の絶対性』の向こう側はあるか」という発表がなされました。僕の感想を言わせていただくと、もう1ヶ月以上も前に、この報告のペーパーが届けられた時、これを読んで、今回のシンポジウムの半分ぐらいの意味が、満たされたかな

と思いました。

このシンポジウムの狙いを受けて準備していたものだものですので、聴衆の便も考え、この論に出てくる吉本隆明さんの「関係の絶対性」という概念について、少し補足してみたいと思います。

「関係の絶対性」は、非常に難解な概念で、これまで戦後の思想世界にあって大きな影響をおよぼしてきたものですが、いったいどういう考えなのかということについては、実は、定説がありません。1950年代中葉に書かれた『マチウ書試論』という論考の最後に出てくる言葉で、この論考で読むと迫力は否めないのですが、それを概念として受け取ろうとすると、多義的で、吉本さん自身が、これを「関係の客観性」とも言われたりして、さまざまな説明を試みなければならなかった。そういうキー・ワードです。今回の見田さんの発表では、その意味はとても明解ですが、この概念が、これほどシンプルな形で指摘されたことは、これまでになかったと思います。

見田さんの指摘の新しさというか特長は、第1に、「関係の絶対性」という言葉が、1960年代当時、なぜ多くの若い人々の心を捉えたか、それが概念としてどのような生き方をしたか、というところで、思想とその言葉を捉えている点です。思想とか概念といったものは、いわば機械の部品のようにそれが生きている文脈から取り外し、それだけを見ると、どんなふうにも言えるものです。これまでこの言葉は、「主観を越えた他者との関係の総体を全体的に把握することの(主観的内在的な考え方に対する)絶対的な優位性」というように理解されていました。肯定的な意味で受け取られ、学生運動の担い手などを支える概念になっていたのです。ですが、運動の当事者がたとえ、ある世界認識を、これは自分の主観を超えた絶対

的な関係の総体の把握であると確信したとしても、それも彼の思い込みかもしれない。関係の絶対性は、内在的な主観の相対性に対置された概念ですから、その絶対性の確信が、これまた思い込みにすぎないということがあるとしたら、この概念は空転していると言わざるを得ません。そこをどう考えればよいのか。そういう反論が出てきましたが、これに、誰にも納得できるような説明はなかった。しかし、だからといってこれを捨て、ここから離れるには惜しい、あるいは簡単にこれを否定することを躊躇わせる、リアルな感じが、この概念にはあった。それが、この概念が、難解なまま、疑問符つきで、しかし、人々の間に深く生き続けた理由です。

僕の説明は、こういうものです。

吉本さんが「関係の絶対性」という概念を発想した動機は、彼の戦中体験だと思います。吉本さんは、戦争中、10代の終わりあたりで、考え抜いたあげく、主観的には、白人支配を終わらせなければ、アジア、非西洋諸地域は解放されない、日本はそのため戦争している、この戦争のために自分は死んでもよい、とまで思い詰めましたが、戦争が終わってみたら、日本はアジアの解放者どころか西洋諸国の真似をした侵略者でした。阿片を売ったり、アジアの普通の人々を蹂躪したり、いろいろ悪いことをしていた。主観だけではダメだ、世界の関係の総体を把握するようないわば関係の思考がなければ、人は誤る、関係の思考のそのような意味での絶対性というものを、自分は戦争体験を通じて、思い知った、というのが、そこから見た時の、「関係の絶対性」の意味でした。

ところで、その吉本さんの把握の特異性は、戦中体験に言及しながら、関係思考の重要性を強調する一方で、けっして自分はバカだった、といった仕方です。その誤った自分の主観的な思い込みを簡単には否定しなかったという点です。それにはそれなりの根拠があったが、それでも、やっぱり間違っていた、という形でその認識は語られました。

主観的な内在的思考と客観的な関係的思考の比重は、他の人の場合のように、0対10とか2対8とかではなく、4対6くらいだった。

それが、この概念が後に、別の文脈で再び芽を吹きだし、戦争体験と戦後の少数派左翼体験とにまたがり、重層的に流通するようになった理由だと思います。

1950年代末から60年代にかけ、この概念は、別の文脈の中に置かれ、生きはじめます。新しく全学連といった学生組織が出来て、過激な政治活動、反体制活動を行うようになると、この「4」の内在的な思い込みが、「6」の、実体としてはマルクス主義的な世界認識であるような関係的な思考を身にまとい、オールマイティ性を自称するようになります。そしてそのような自説の正当化への必要とそれをささえる現実性が、この「関係の絶対性」という概念に、戦中期の思い込みに相当する少数政治党派の思い込みの過激性を通じ、新たな意味をまとわせ、過重ともいえる意義を背負わせることになりました。

そのために、この概念は「難解」になりました。それは、いわば内在的な主観的な思い込みからはじめても、もしそれが関係の思考に到達できていれば、正しいものとなりうる、という過激な主観的思い込みによる行動を正当化する概念として、当時の若い人々のうちに生きるようになったからです。これは論理としては破綻している。しかし、ここには当時、これによる以外に行動に向かうことができず、しかも行動に駆り立てる現実上の矛盾は深いという現実性がともなわれていて、これを単に論理的破綻として否定し、捨てきれないリアリティがつきまとっていた。見田さんは、そのあたりを、見落とさずに、きわめてシンプルに、この意味での「関係の絶対性」の本質を取り出しています。

また、第2に、この吉本隆明の概念を、見田さんはここで見田さん独自の仕方でも再定義しています。第1部でちょっと触れましたが、見田さんには、ルール圏と交響圏という考え方があります（『交響圏とルール圏——社会構造の重層理論』『岩波講座現代社会学』第26巻、岩波書店、1996年）。人間の関係世界は、100人くらいまでは、互いに相手の顔を知り、間主観的な関係性で相手の顔を見分ける人間的つきあいの輪というものを

作れるが、それを越えると、そういう関係は不可能になり、いわば顔の見えない他者と共通のルールというものを互いに承認し合うことで関係世界、社会といったものを作ることになる、つまり人間社会の成り立ちには、家族から共同社会へ、という発生機の構成に対応するように、交響圏からルール圏へ、簡単に言うと、「つながり」から「関係」へとでもいうような、重層の構造があるという考え方です。

さて、そうだとすると、そこでの他者理解は、ちょうど光が水に入ると屈折するように、顔の見える交響圏から顔の見えないルール圏へと発信される過程で「屈折」します。見田さんの理解は、「関係の絶対性」という考え方は、この他者理解の「屈折」に根拠をおく、社会に住む人間にとっての他者理解の不可避的な契機をなすのではないか、という直観を含んでいます。交響圏で顔の見える他者つまり同胞に我慢できないほど理不尽で不当な攻撃、抑圧が及んでいる場合、人は、どうしても、ルール圏の顔の見えない他者に対しては、交響圏の顔の見える他者に対するのとは異なる基準、「二重基準」を適用するようになる。そこでは、顔の見える同胞への連帯に基礎をおいた、顔の見えない他者の切り捨てが、正当化されつつ遂行される。これが再定義された「関係の絶対性」の根拠の内容です。被抑圧者・被搾取者が彼の自らそう考える抑圧・搾取の極点で、いわば絶望をテコに採用することになるその二重基準をささえる根拠として、「関係の絶対性」が再定義されているのです。

そのようなものとして、現在、「関係の絶対性」という概念を、9・11が明らかにした絶望的テロリズムをささえる最終的な論理として取り出すことができるというのが、見田さんのこの出来事に対する答えです。9・11は、この「関係の絶対性」をどう超えるかという問題を自分たちが解かない限り、この文明のシステムは崩壊する以外ないということを、明るみに出した、という指摘ですが、僕は画期的なペーパーと受けとめました。

### パネラー間のグラデーション

さて、ここで話を第1部のパネラー皆さんの発表に戻します。パネラー各自のお話を通じて僕が今回のシンポジウムの1つの前提となっていると感じたのは、こういうことです。

デビューして2年目ぐらいの頃、小説家の村上龍が、新聞で、なかなかよいことを言いました。彼は、「自分は最後に主人公が死ぬ小説ではなくて、主人公が最後に死なない小説を書きたい」と言った。要するに、最後に主人公が死ぬ小説というのは、ちょっとまずくなっちゃうと、最後に主人公を殺せば何とか小説になってくれるので、小説制作上、簡単です。その分、安易でもある。最後に主人公が死なないまま終わるためには、そこにかなり強靱で堅固な理由、内実がないといけません。それと同じく、僕は、思想においても、最後に主人公が死ぬ思想と、最後に主人公が死なない思想というのがあると思うのですが、今回の皆さんのお話は、少なくともその点で、このシンポジウム会場の外で行われている、いわば最後に主人公が死ぬロマンティックな主張とは、違っていると感じました。

また、第1部の4人の方の発表から、大きく、橋爪さんの発表と、宮台さん・竹田さんの発表、さらに見田さんの発表と、——見田さんは社会学なのですけれども——社会学ないし社会科学と哲学ないし思想、あるいはマンツーマンディフェンス式対応とゾーンディフェンス的対応、また現実的短期的視野に立つ指摘と構想的長期的視野に立つ指摘という二極の間のスペクトルがグラデーションとなって並んでいるという感想を抱きました。橋爪さんは、9・11以後、何が国際社会と国家と社会のうちで、変わるのか、指摘してみようと、戦争の形態、あり方を手がかりに考察して、国家と社会をささえた近代の前提が以後、「脱臼」していく、という見方を提出しています。これに対し宮台さんは、橋爪さんとだいたい同じ姿勢でこの問題に接近しつつ、先の見田さんの用語で言うなら、社会システムの構造が、小さい射程の社会（交響圏）での幸福追求が大きな射程の社会（ルール圏）での不幸に反転するようになったことを指



摘して、問題が「テロ対策」から「21世紀の社会システムを国内的・国外的にどう構想すべきか」という形に深化してきたことを、指摘しています。竹田さんも、今回のテロを、近代の市民社会が生み出した資本主義がこれまでもたらした3つの大きな危機のうちの最新のものと位置づけた上で、近代全体の視野の中で資本主義の矛盾を克服する可能性が将来構想として示されること、つまり現在の諸矛盾は袋小路ではなく、希望につながりうることを示すことがこのテロを根絶するための基本的な条件となるという見通しを示し、そのカギを自由という概念に求める見方を提示しています。そして見田さんになると、先に触れましたが、この敗者の怨念の形象化としての「関係の絶対性」の克服がカギになるとして、その方向として、被支配者、支配者双方の支配と搾取のシステムからの自立のシステムの構想と、それをささえる新しい人間観の必要を、示唆しています。

いわば前者が外部から、見田さんの『現代社会の理論』での言い方を用いるなら自己準拠系（世界が自分で自分をささえるシステムとなっていること、たとえば1920年以降資本制システムは消費者の欲望を喚起させることで自分で需要をも生み出す自己準拠系となった）の「外部問題」として9・11をとらえているとしたら、後者がこれを内部から、「内部問題」として、とらえている、という関係が、橋爪さんと見田さんのアプローチの関係であり、その中間に、宮台さんと竹田さんの指摘が位置していることがわかります。そして「世界心情」を言う僕は、さしずめこのグラデーションの橋爪さんの逆の極になるかと思えます。

### 3つの共通点

さて、その上で整理すると、各人それぞれに独自の指摘、構想が提示されましたが、それでも、これら全体の発表を通じて、いくつか共通の括りが可能です。僕の大きな枠組みでのまとめは、次の3点に集約されます。

第1は、4人の方のお話から浮かび上がる共通認識で、これを「絶望・怨念・監視」とまとめることができます。9・11は近代の基盤が大きく損

なわれようとしているという意味で、今、われわれが非常に危機的な状態にあることを明るみに出す出来事だった、ということです。期せずして、このことが、先の竹内さんの問題提起への答えになっています。「絶望」、これは竹田さん、見田さんの発表に出てくる言葉で、宮台さんの言葉では「怨念」と語られ、その先に来る社会のキー・ワードとして「監視」ということが、橋爪さんから示されています。

第2は、今回のお話から明らかになった、僕たちの場所からこの世界大の出来事を見た場合に出てくる問題で、これはこのシンポジウムの表題に沿って言うと、「社会と国家」の間の関係の問題です。これをもう少し敷衍して言うと、「人間と国家」でもいいですし、「人間と世界」でもいいですけれども、9・11という出来事を、どこから見なのか。国家と国際社会からか、社会と世界社会からか。その場合の両者の関係はどうなるのかという問題です。先ほど、4人の方のお話が社会学・社会科学と哲学・思想の二極の間にグラデーションを描くようだったと言ったことと関連します。先の橋爪さんのお話は、いわば社会の「システム」、国際社会の「構造」のレベルから問題を取り出す構えであるのに対し、見田さんの話は、そこに生きる人間の「自由」と「実存」のレベルから、問題を取り出してくる構えであり、宮台さん、竹田さんがそれぞれ異なる仕方で、その2つをつなぐ観点を提示していました。しかし、その結果どういうことが起こるかというところ、こういう問題が出てくる。

お1人1人の話を聞くと皆さんすごく強力で、説得力もあるから、なるほど、と思う。つまり橋爪さんのお話で言うと、橋爪さんの話に納得させられながら、ずっと考えていった場合、なるほど、「予防戦争」は必要なかもしれない、しかし監視社会になるのか、と考えずめることになるし、それはそれでまた宮台さんの話になると、今度は、なるほど、いまやアメリカ的な生活様式が世界大に1つのシステムと連動しているとすれば、アジア主義の見直しが1つの手がかりか、となる。竹田さんの話を聞けば、資本主義でもやっつけける

という原理が示されれば、なるほど、テロは原理的に根絶されうることになるかもしれない、と思う。しかし、実は4人の方がおっしゃっていることはみんな違うことなのですね。

そうすると、なるほど、と四回思ったあとで、このAとB、BとC、CとD、DとAの関係というのはどうなるのか、という問題が生じる。これは、僕も発言しているわけなのでそんなに他人事として無責任に言うてはいけませんが、一応半分部外者の場所に身を置くと、そう言えるだろうと思う。そういう形で、外部問題（世界—システム—構造）からはじめるか、内部問題（人間—自由—実存）からはじめるかが問題になると思うのです。

具体的に言うと、こうなります。例えば橋爪さんのお話で、なぜアメリカが「予防戦争」のためイラクに行かなくてはいけないかというように聞いてくると、なるほど、と思う、でも、その結果、爆弾が落ちるとその下には人がいて、この間のアフガンの場合のように、普通の人が死ぬわけです。そうすると、その普通の人が死ぬというような問題は、この橋爪さんのお話の中のどこに、どのように入ってくるのだろうか。そういう問題が出てくる。

見田さんのお話では、そういう関係構造を克服するために、むしろ必要なのは民衆の「自立」なんだというようなお話だった。すると、橋爪さんの今、展開された説得力のある国家レベルの話とこの見田さんの民衆の「自立」の話が、どんなふうに関わるのだろうか、どこがお2人の違いの点なのか、というようなことが、気にかかってきます。つまり「人間と国家」というか、「社会と国家」というか、「内部としての世界」と「外部としての世界」というか、その2つの問題の、お互いがお互いを自分のライトで照らし合いつつ、その照らし合う根元は自分では照らせないという関係の構造がここにはあると思うのですが、その足元部分を互いに指摘してもらおうとどうなるか、といったことが、この第2の論点から出てくる問題です。

第3は、このあとどういうすじみちがいわば

「主人公が死なないですむ」ため、必要か、ということ。ここでの議論の「主人公が死なない」先に、どのような克服の道があるかという構想では、やはり各人がそれぞれに異なっています。

見田さんは「自立」と言われ、さらに「関係の絶対性」という考えをどう向こう側に抜け出していくか、と問われた。それをふまえてその先にローレンスの言葉を出し、人間観の更新にも手をかけられています。

竹田さんは、この克服の方途を、現在の資本主義を、その問題点を克服する「正当化する資本主義」へと変革することとした上で、その構想を作り上げる上での原理は、「自由」だとおっしゃっています。中で僕などに独特だと思われるのは、今回の主題と少しダブらせて考えた場合、国家というものを対外的な利害共同体というようにははっきりと言っているところです。つまり、ふつうは対外的な原則と対内的な原則とは社会原則として一致しているべきだと言われていて、ナショナリズムというのは、対外的な原則をその内側にもそのまま適用したら内部が植民地のようになってしまうだろう、だから社会原則としてまずいのだ、というように語られるのですが、国家を対内的には公共的な存在とみなしつつも、対外的には利害共同体とみなすというのは、新しい国家の捉え方になっている。国家はまず対外的には公益ではなく国益を追求する、そのことは非難されない、その上でマイナスが生まれてこないような仕組みを考えないといけない、という構えを見せている。このあたりで、その背後にある考え方の違いが出てくるように、もう少し、お話をお聞かせいただければありがたいと思います。

宮台さんからは、広くは、「21世紀の社会システムを国内的・国外的にどう構想すべきか」ということが課題として示されました。その上で、「反米アジア主義」という、これは宮台さん特有のいわば「偽悪的」めいた言い方なのかと思いますが、現在の「自由」の魅力というものが「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ」という形で最貧国にいたるまでの民衆を引きつけている、という宮台さんの判断に立った、その回路から外に出る

ための対案ないし対案のヒントが、示されています。

また、橋爪さんからは、戦争の観点から、今回のできごとの新しさに光が当てられ、そこから見えてくることとして、21世紀は、監視社会が出現して、国家と市民の対立が顕在化し、近代の前提が「脱臼」することになる、ということが示されています。話はそこまでで終わっていますが、するとやはり、どうであれば、この困難を克服できるのか。そういう問題がここから出てくることになります。

#### 司会からの質問

これを受けて、それぞれ4人の方に、次のような質問を用意させていただいています。

まず、橋爪さんについては、2つあります。1つは、先程申し上げたことですが、第1部の話のどこに普通の人間が入ってくるのか、ということ。具体的には、イラクへの「予防戦争」が実施されると、再び普通の市民がその犠牲になると考えられます。それをどう考えればよいのか。普通の人間もまた、こういう国家レベルの話の都合をちゃんと了解しなきゃいけないんだよ、ということなのか。そうではない別の考え方であるのか。あともう1つは、もう少し大きなことです。最後に橋爪さんの言われた国家と市民の対立というのは、これまで橋爪さんが唱えられてきた市民が主体で国家を共和政的に再編していく、市民のイニシアティブとコントロールのもとで国家というものを考えていく、という主張から言うと、全くその前提がなくなってしまうというお話だと思うんです。すると、これまでの橋爪さんの近代的な構想は、撤回されることになるのか。いや、そうではない、ということなのか。

次に、宮台さんについては、グローバリゼーションの3つの焦点としてあげられたうちの第3点、この動きに服する者たちの「高度な自発性」が、国際社会のシステムの中で、いよいよ自分達を弱者化する結果になってしまうという指摘について、お尋ねします。これは、見田さんが、ソ連がアメリカに敗北したのはアメリカや西ヨーロッパ

の「情報と消費の水準」と『『自由な社会』であることの魅力性」ゆえだと述べられた。そのところを、宮台さんが、いま「イスラム圏を含めて誰も」が望んでいるのは——「自由な社会の魅力性」でありつつ具体的には——「アメリカ式生活様式（アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ）の魅力性」なのであって、現在確立の度合いを強めつつあるグローバリゼーションのシステムの中で、その待望・希望の構造は、彼らがそれを望めば望むほど、いよいよ弱者化していくという逆説を生みだしている、そうである以上、そのままではこの自由の魅力への自発的な吸引は、システムに回収される結果になる。それとは別種の「魅力性」、あり方、原理を導入することが現状打開の糸口となる、とこの見田説に対し、いわば対案を提示しているところだろうと思うのです。

この対案が、「アジア主義」という名で語られていることでしょうか。この見田さんの指摘は、僕なども同感し、高く評価している点ですので、いや、それではダメなのだ、とお考えであれば、このあたりでももう少しおっしゃっていただけると、議論が交差して面白くなると思います。「アジア主義」については後の討議で補足して下さることなので、このことも含んで、後にご発言いただければと思います。

また、竹田さんについては、宮台さんのような社会観を竹田さんはどう評価し、竹田さんの構想の中に、もし繰り入れると考えられる場合は、どう繰り入れられることになるのかをお尋ねしたい。変なことをお尋ねするようですが、僕が今日ぜひ宮台さんに来ていただきたいと思ったのは、宮台さんの社会学が、いわば宮台さん言うところの成熟社会以後の、近代社会とそこに生きる人間を「壊れた社会」を生きる「壊れた人間」と捉える点で、新しい社会学だと思うからです。そういう意味で、見田さん、橋爪さん、とやはり違う社会学になっている。竹田さんは、近代の起点に戻って、そこから構想し直すことが大事だ、といういわば正規軍的な理詰めの考え方をしてくれていると思いますが、これに対し、宮台さんは、ゲリラ戦的に、近代の破れ目から発想しているようにも見

えます。

しかし、宮台さんを持ち出さなくとも、情報社会、消費社会ということが1920年代あたりから始まる。これはある意味で近代社会が狂いはじめるというか、壊れはじめたことだと思うのです。このあたりから、資本制の経済のシステムが、自分から商品の需要をも作り出して、自分に市場の需要をすらも供給していく自家発電的というか、自己言及的というか、見田さんの言葉で言うところ「自己準拠系」のシステムになってくる。やはり人間というのは、壊れているから、欲望を刺激してやれば、いくらでも反応する、その反応は満腹することを知らない、限界がないんだよ、というところがある。会場に岸田秀さんの顔が見えますが、岸田さんの言うところ、「本能が壊れている」ということが社会についても言えるんじゃないか、そういう「壊れた社会学」を立ち上げているように見えるところが、宮台さんの特異さかと思えます。そういう「壊れている」近代に立つアプローチを、いや、近代の原点に戻って考える以外に方法はない、と言っておられる竹田さんは、どう評価されるか。こういう観点を排除するか。繰り入れるか。そのような点を、お聞かせ下さい。

見田さんに関しては、今回のお話と、『現代社会の理論』での考察の関係について。

今回のお話は、吉本さんの「関係の絶対性」から「自立」という歩みもヒントと、ローレンスの一見極端とも見える死の直前の人間観のもつ可能性への言及で終わっていますが、一読者として、ちょっと感想を付け加えますと、吉本さん自身も、実は水難事故を経て書かれた『アフリカの段階について——史観の拡張』の中で、内在史と外在史ということを書いて、そこにはローレンスの『アポカリプス』最終章に見合う、人間観の更新の視線を提示されているのです。そのあたり、吉本さんの方向と見田さんの方向が重なっている。いろいろと想像力を刺激されるのです。見田さんは、この自立システムについては、『現代社会の理論』でだいぶ展開されている。そこでの議論と、今回のご主張との連関は、どうなっているのか。これについて、もし可能であれば、後の

発言で触れていただけるとありがたいと思います。

と言いますのも、『現代社会の理論』のあとがきに、見田さんのこの著作の主題に関する著述構想の全体構成が7章構成で示されていて、それは、

- 一 情報化／消費化社会の展開  
— 自己準拠系の形成
- 二 環境の臨界／資源の臨界  
— 自己準拠系の「外部問題」I
- 三 南の貧困／北の貧困  
— 自己準拠系の「外部問題」II
- 四 情報化／消費化社会の展開  
— 〈自由な社会〉の条件と課題I
- 五 「現代人は愛しうるか」  
— 自己準拠系の「内部問題」I
- 六 リアリティ／アイデンティティの変容  
— 自己準拠系の「内部問題」II
- 七 社会構想の重層理論  
— 〈自由な社会〉の条件と課題II

というのですが、『現代社会の理論』では、この四までが網羅されていると断られている。五から七までが今後の課題だと言われている。そして、その〈五「現代人は愛しうるか」〉は、D・H・ローレンス『アポカリプス』の日本語訳の題名なので、今回、第1部の発表で展開されたことが、この「自己準拠系の『内部問題』I」にあたる部分なのではないかと思われるからです。また、先にふれた「交響圏とルール圏」はこの構想の七にあたる部分の核心部分ですが、これを読むと、実はローレンスの『アポカリプス』の引用からはじまっているのでした。この間の連関について。むろん、これは可能な範囲で、というお願いです。

あと、最後に、この後の発言で、見田さん以外のお三方には、見田さんの発表をどう聞かれたか、あと見田さんには、そのお3人の発表をどう聞かれたか、についても触れていただければ、と思います。

では、話された順で、橋爪さんからお願いします。



## 普通の人々が死ぬことをどう考えるか

橋爪 はい、ありがとうございました。

いろいろなことを聞かれましたが、普通の人々が死ぬということはどういうことかという質問がひとつ、もうひとつの質問は、国家と社会が対立するようになったときにどう考えたらいいか、この2つに答えようと思います。

普通の人々が死ぬというのは、もちろん避けなければならないことなんですけれども、死に方はいくつもあるって、1つはテロリストが普通の人を殺す。もちろん全員殺すわけではなくて、普通の人の中から無差別に理由なく殺すと、そのことによってパニック、恐怖が起きます。その恐怖を引き起こして、ある政治的な効果を収めよう、できれば要求を認めてもらおう、これがテロリストの政治的方法です。

これを認めてしまうと、不当に特殊な主張をする、決して大多数を代表しない人びとが、大きな政治力を持つという、不正義が通ることになる。テロというのは、政治としてはルール違反なんです。ですから、これを抑止し、反撃を加えなければならない。そういうテロ活動を防いで、普通の人々が死ぬのを避けよう。これはだれでも考えることで、これはやらなければならない。テロに理由があるという話はまた別で、それはほかの方々が十分話しました。

もう1つ、普通の人々が死ぬケースは、モスクワの人質事件のようなときです。例えば36人のテロリストがモスクワの劇場で600～700人の人質を確保して、ロシア政府に要求を突きつけた。人質の人命はとても大事ですけれども、しかしテロリストの要求は、ロシア政府からすれば大変理不尽なわけです。

この解決の方法は、テロリストと交渉をするようなふりをして時間を稼ぎながら、突入のタイミングを図る。そして、特殊部隊などテロ対策のプロを動員し、テロリストに対して武力で攻撃を加え、テロリストを全滅させる、あるいは捕縛する。その過程で、人質の救出は最大限追求するけれども、最悪のケース、人質が全員死亡してもやむをえない。これがテロリストに対策を講じる場合の

基本原則だと思います。

ですから、600～700人いて、100人程度の被害ですんだというのは、まだ幸運なほうだったと思います。36人のテロリストを殺害するのに、人質が100人死んでしまったわけで、非常に理不尽に見えます。でも、もしこれをしなかったら、やはり今後こういう事態が続発するわけですから、普通の人々の死亡をミニマムに押さえているんだと思う。これが普通の人々が死ぬことに対する基本的な考え方です。

あと、アフガンの巻き添えによる被害者のことに関しては、いろいろところで書いていますから、今日は省略します（橋爪大三郎・島田裕巳 2002『日本人は宗教と戦争をどう考えるか』朝日新聞社、橋爪大三郎 2002「テロ相対主義の愚」『読売新聞夕刊』1月18日、大澤真幸・橋爪大三郎「9・11」なお重き問い『論座』88:14-27）。

## 国家と市民の対立

2番目の問題ですが、国家と市民が対立する場合。もし、その犯罪者が国内にだけいるのであれば、通常の国内の法律で取り締まることができずから、法律体系としてはそんなに問題が多くない。けれども、犯人が国際的にネットワークを張っている場合、ある国がその市民の安全を100%守ろうと思うと、外国でも軍事活動や警察活動をしなければならない。まず、その外国の主権を侵害するという状態が生まれます。それから、外国の人びとの人権を抑圧するという事も生まれる。もし、どの国も相互にそういうことをするとすれば、いわゆる監視——市民がそういうことをやってくれと頼んだ以上のこと——を政府がやることになりますから、非常に緊張状態がどの国でも生まれてくるんだと思います。

この問題はなかなか難しく、基本的には、市民の相互監視を、市民がどこまで認めて許容するかということだと思えます。その市民は、忙しくて相互監視をしている暇がないので、それを政府に頼んで代行してもらおう。民主主義社会の中でも、これはできることだと思います。

では、どの範囲までが許容でき、どの範囲まで

が許容できないのか。それは、取りあえずその市民が決めるしかないのではないかと。形式的に考えると、これ以外に答えがないです。ただそれは、テロの可能性にもよるんですけれども、大変に厳しい問題がこれから起こってくるというふうに言えると思う。取りあえずこれぐらいにします。

## 「外」の消滅

宮台 基調発言で端折った原理的な部分を補足させていただきます。先には橋爪さんに絡めてお話ししましたので、ここでは主に見田さんに絡めてお話しいたします。

僕の話の主題は「システムに対する適応不全は悪なのか」でした。この点を補足します。近代とりわけ資本主義のシステムに適応することが、なぜ自明に良きことだと考えられてきたのか。答えは「システムに「外」があったから」です。それは家族共同体だったり、地域共同体だったりしました。これらの「外」にとっての利益がもたらされると感じられたので、システムへの適応が良きことだと考えられたのです。

ところが資本主義のシステムが展開するにつれて、家族共同体の諸機能は次々と社会化され、システムによって提供されるようになります。地域共同体も、戦後の郊外化で急速に空洞化し、機能的でコンビニエントなシステムモジュール（交換可能な部品）に置き換えられる。その結果、システムの「外」にある家族や地域にとっての豊かさや便利さが増すからといった理由でシステムを正当化することは、困難になってきます。家族も地域もシステムの機能的な一側面にすぎなくなるからです。かくしてシステムの良し悪しを判断する評価軸の原点が失われていく。それでも「私」が幸せになるからという理屈が残りに見えます。でも家族や地域といったシステムの「外」が失われた後に残る「私」とは何なのか。コミュニタリアン（共同体主義者）の憂うように、単なるリレー・スイッチのごとき、システムの入替え可能な操作項にすぎないのではないかと。だとすれば「私」ですらもシステムの機能的な一側面にすぎなくなります。

かくして、システムに「外」がなくなると、システムへの適応の良し悪しを判断する物差しが消えてしまいます。基調発言で触れましたが、アメリカの精神医学会は、パーソナリティ・ディスオーダー（人格障害）について新見解を出しています。第1に、人格障害が郊外化の歴史と並行して出現したこと。要は、「良き家族」のメディアイメージに煽られた揚げ句の適応不全が生じ、この適応不全的な家族関係における子供の側の心理的解決がパーソナリティ・ディスオーダーという形を取ったのだということです。

加えて、第2の論点があります。先の席卷するメディアイメージをも含めた郊外化のシステムに適応することが、果たして健全なのかどうか。むしろパーソナリティ・ディスオーダーという形で適応不全を示すことこそが、健全さの証しなのではないか。あえてシステムに適応すべしというのなら、立論の根拠を示す必要が出てくる——うんぬん。

精神医学は従来、社会システムへの適応不全について、適応不全を起こす人格システムの側面を問題にしがちでした。最近では社会学のように、社会システムに対して疑問を呈するようになってきた。いい傾向です。でも知識社会的に言えば、近代システム自体に正当性を与える物差しに揺らぎが生じてきた徴候です。これは世界各国に共通の問題であると同時に、基調発言で紹介したアジア主義が、近代それ自体の正当性を問題視する構えにおいて先見的たるゆえんです。

## 危険なのは国家よりも社会だ

もう1つ、国家と社会の問題について語り残しています。9・11以降、アメリカの憲法学会は主流学説が180度変わりました。従来は、皆さんがご存じのように、「疑わしきは罰せず」あるいは「100人の罪人を放免するとも1人の無辜の民を刑することなかれ」という刑事訴訟法的な原則に象徴される憲法観が支配的でした。そのエッセンスをひとこと言えば、「危険なのは社会よりも国家だ」という概念であり、ホッブスの「リヴァイヤサン」という観念によって象徴されます。

ところが、9・11のテロを契機に、アメリカの憲法学会で「危険なのは社会よりも国家だ」との観念が、「危険なのは国家よりも社会だ」という観念によって取って代わられました。先の物言いになぞらえれば、「100人の無辜の民を刑するとともに1人の罪人を放免することなかれ」へと変化したんです。

これで僕たちが思い知った事実があります。基調発言で述べた近代的公共圏の話ともつながりますが、従来のリベラルな近代的憲法観なるものは、ある前提の上に成り立っていたということです。社会は信頼できる。あるいは知らない人間は信頼できる。そういう信頼の上に成り立っていた。だからこそ、その信頼が当てにならなくなった途端に、近代憲法の見本たる合衆国憲法を持つ国の憲法学会が、学説を180度転換したわけです。アラブの人たちを令状なしで拘束し、裁判にもかけずに長期拘留する現実を肯定してしまふ。

確かに公安問題と同様、社会よりも国家が危険だとのドグマに固執し、事実として危険な社会を、放置すれば、社会契約の当事者である社会が崩壊し、立憲制も何もなくなくなる。その意味で、緊急避難として憲法外的な措置を正当化する学説転換を容認できそうに見えます。でも、それが本当に公益に資する緊急避難なのか、緊急避難のふりをしてつつ特殊権益に奉仕する施策なのかを識別する方法は、憲法内にはない。統治権力を市民が監視して憲法というルールに従わせるという要求が、括弧に入れられてしまっているのは恐るべきことです。

#### 我々は誰を「人」として認識できるのか

しかしそれとは別に、いま申し上げた憲法リベラリズムそれ自体の限界も、リチャード・ローティによって語られている。アメリカが国外でいかに多くの民間人を虐殺してきたかはチョムスキーを待たずとも常識ですが、国内でも何をしてきたかを思い出しましょう。アメリカは合衆国憲法修正十箇条によって人権を守る国だなどと思っている方はどうかしています。1952年のアカ狩りの時は共産主義者に人権はなかった。65年のベトナム北爆直前に黒人の戦争動員のためにジョンソン

大統領が公民権法に署名するまで黒人に人権はなかった。9・11以降のアラブ系に人権はない。かつての男に対する女性もそう。修正十箇条がいかに崇高な人権理念を掲げても、男性アングロサクソン以外に人権は適用されない。すなわち人ではなかった。これがアメリカの歴史です。

要は、我々が誰を「人」として認識できるのか。これは法律の問題でも哲学の問題でもなく、実践の問題です。だから、「暇人は哲学をやれ、志あるものは感情教育をやれ」とローティは言う。先にリベラリズムの本義は、立場の入れ替え可能性の確保だと言いました。立場の入れ替え可能性の必要をどの範囲に想定するのかについて感情のベースを書き換えるべく、コミュニケーションを通じて日々実践せよ。これがローティのプラグマティズムです。ポストモダン・フェミニストやラディカル・デモクラットを踏まえた議論です。たとえ制度的な人権や自由を公的に保障しても、人権や自由を用いて人がどんな私的実践を行うかは指定できず、人権や自由を保障する制度の下で抑圧的な実践がありうる。だからといってリベラリズムや合衆国憲法に敵対するポストモダンイズムは愚かで、リベラリズムを踏まえた実践あるのみというわけです。

立場可換性には必ず一定の範囲がある。その意味でリベラリズムには外部があり、近代には外部がある。その外部は絶対に消せない。まず、消せないことを自覚し、次に、消せない外部をできる限りミニマムにすべく「実践」する。それが、暇人の哲学問答や社会学問答と区別される、真のリベラリストがなすべきことです。かかるテーゼは、竹田さんの語る哲学的な原理原則に比べて脆弱に感じられるかもしれません。しかし脆弱なのはむしろ、そういう哲学的な原理原則の上に立てられた近代的な諸制度の方であり、それに対処するには先のリベラリストの実践以外にありえないでしょう。

#### 「自立の思想」について

あと「自立の思想」ということを見田先生がおっしゃいました。先にアジア主義にはいくつかの柱

があると申しましたけれども、グローバリズムに対抗する処方箋として、自立経済圏を形成するための軍事経済ブロックという思想が130年以上も前から提唱されていることが重要です。これを直ちに正当化できるかどうかは別にして、実際には、資本主義を認めようが、あるいは近代を認めようが、グローバリズム、あるいは帝国主義的な席卷に対抗できるような一定の、障壁が必要であるという考え方は、古くから存在しています。特に日本にはアジア主義という形で存在してきています。

これは、なかなか微妙な思考です。たとえば、既得権益への固執を排除するための規制緩和という概念と、コンパチブルじゃないように見えます。逆に言えば、規制緩和＝グローバリゼーション万歳なんていうふうには、思想なき者たちは考えてしまいがちですが、リベラリズムの本義に従えば、規制緩和によって、勝ったものが勝ち続け、負けた者が負け続けるという、リベタリアンの、ネオリベ的、優劣劣敗的な弱点が出て来ないようにすることが、やはりどうしても必要になってくるわけです。つまり、リベラリズム的な本義からして、既得権益の温存を排して規制緩和をしなければいけないが、その同じ本義からして規制緩和によるグローバリゼーションの席卷で構造的な貧困に巻き込まれるのもよろしくない。思想なき者にとっては、規制緩和＝グローバリゼーション万歳という思考になってしまいがちですが、自立確保の観点からすると、一概に規制緩和を推奨できません。ほかにもいくつか論じるべき論点があります。

#### 「正しい勝ち方」について

見田先生が「正しい勝ち方」とおっしゃいました。その「正しい勝ち方」は、アンソニー・ギデنزというイギリスの社会学者の言うインクルージョン（包摂）と近い。第1に、リベラリズムの外部や近代の外部ができるだけミニマムになるように内部へと取り込み、近代社会そのものへの敵対動機が醸成されないようにする社会政策的な観点において。第2に、我々が立場の入れ替え可能性の範囲として想定するものができるだけ広くなりうるようにする教育実践的な観点において。巷

で思考停止的に語られるギデنز＝新しい社民という図式を超え、リベラリズムの本義にかかわる提案がなされていると見るべきです。

ただ残念ながら、ブレア政権のブレインでもあるギデنزには、アメリカのアフガン攻撃に際して「テロリストは近代社会に脅威をもたらすので、国際社会は連帯して断固武力で対処せよ」と主張し、読売新聞にも掲載されました。僕は腰を抜かした。基調発言で述べた「法的意思の貫徹」と「社会政策的な実践」のバランスという問題が看過されているのがありますが、「ギデنزよ、お前の言う『包摂』って何のことなんや」と頭を抱えた（笑）。近隣のナチの政権に軍事的に対抗することこそが反ナチ的だとしたハーバーマスの独軍コンボ出兵支持とは事情が違い、9・11の背後にある政治的怨念については、リベラルな先進社会にこそ責任があるからです。ギデنزにはリベラリズムの本義に関する無知を暴露しました。

ただ、ここでグレードブリテン的な戦略というのを弁えていただきたい。

ブレアはおもしろいですね。9・11以後のアフガン攻撃の際もアメリカに言われるままに特殊部隊をすぐ出しました。そのようにしてアメリカに恩を売ったあと、例えばアメリカがイラクに宣戦拡大をしようとする、それはやめろというふうにはアメリカに抑止をするわけです。今回のイラク攻撃でも全く同じことが起こりましたよね。

アメリカがイラク爆撃をしようと言ったら、イギリスが諸手を挙げて賛成したように、皆さんには見えた。しかし、その後のプロセスを見ると、フランスとロシアの国連提案に従って、国連のできれば二段階の決議をへてから、国際的な協調を保ったうえでイラク爆撃に乗り出してくれというふうには、イギリスが言っている。このブレアの物言いは、アメリカで言えば共和党穏健派パウエルの物言いと全く同じ形式ですが、ああ、やっぱり、イギリスはそこに落したのかというふうには僕は思いました。

愚かな国粋主義者は、胸がすっとするコミュニケーションをして自己満足をする。表出エゴに淫するわけです。しかし、外交に於いては相手から



必要な反応を引き出すための是々非々の戦略が必要です。アメリカにどう対応するのかというときもそうです。素朴な反米主義はアメリカの思うつぼ。アメリカに対する影響力を全く行使することができません。

さっき佐久間象山の言葉、「攘夷の為の開国」を紹介しましたが、それと同じことです。ブレアは言わば、アメリカに席巻されないための親米です。おお、ブレアはアジア主義をわかっているのか(笑)。そんなわけないんですけどね。

国際戦略の稚拙さや、政治戦略の稚拙さがある限りは、どんなに高尚な理念があっても、アメリカに何の影響力も行使できません。高尚な理念と現実的な対応の間には、一見距離があるように見えます。けれども、それこそロバート・ケネディが言ったように、「真の現実主義者は理想主義者」です。高尚な理念なき者には、泥にまみれた具体的な実践はできません。高尚な理念と、非常にスキルにあふれた現実の政治的対応が、要求されているということです。

#### 近代の歴史は長い列車で進んでいる

竹田 では、3つほど感想を言おうと思います。

1つ目は、見田さんが言われた貧しい国と豊かな国の双方の「自立性」についてですが、異論というのではなく、1つ考えておくべきことがあると思います。それはグローバリズムということにかかわりますが、グローバリズムというのは要するに、自由競争の原理が徐々に世界大に拡大すること、ですね。世界全体が自由競争に組み込まれる。しかしそれは、個々の国の条件にでこぼこがあるからどうしても先進国有利な競争になる。あとから参入する国にしわ寄せが集まり、そこからさまざまな矛盾や格差が出てくる。そこでそのような現在のグローバリズムのあり方に対して、「自立性」というプランが出ているのだと思います。僕も考え方としては反対ではない。現在のグローバリズム、グローバリゼーションにはいろいろ問題があってそれに対処するさまざまな考え方やプランが必要だと思います。しかし、1つ注意すべきことがあって、それは自由経済の進展を、

貧しい国の人間自身が必ずしも拒否しているわけではないということです。

というのも、僕は在日韓国人二世なのでこれについてある感度があるのです。一般的にマイノリティー社会の人間の側から向こう側の豊かな世界がどう見えるか。そこに何があるか、もちろん多くの矛盾も見える、しかしそれ以上に新しい生き方の可能性が見える。特に若い人間にとってその可能性は、強い切望になる。それまでの伝統的生活が競争原理に巻き込まれて世代間の矛盾も起こる。ほかのさまざまな矛盾も出てくる。しかし、にもかかわらず、多くの人間が新しい生活の可能性に強く引かれる。すでに文明化された場所にいるわれわれから見ると、それは虚妄的なものに見えるかも知れない。われわれは世界全体の状態を考えたりそれをいろいろ解釈したりする。しかしそういう知的な場面と実際にその場所を生活している人間の場面はべつです。なるほどこの欲望は倫理的なものではない。それはじつは自分の首を絞めるようなものだという観点もありうるでしょう。しかし重要なのは、それを外部から理念としてその位置に立つ人間にかぶせることはできないということです。資本主義の欲望に身を任せるのは大局から見て危険だという意見は、われわれの場所からの知見であって、内発的な意見ではない。僕の考えは、いま先進国に暮らすわれわれが何を出るかという考えと、後発国の人間がどういう課題を見出すかという問題は、別の問題とするのがいいということです。後発国の人間のうちにあるのは「自由」をつかみたいという切望であって、この切望は、どの国でも歴史的な資本主義の拡張性の根本動力だった。資本主義は無理やり移植されてきたわけではないのです。必要なのは、どの立場にある人間にも一定の範囲内で自分の「自由」をつかむ権利があることを認めた上で、その一般的条件をあげていくということであって、その際、その場面を生きる人間に何が最も大きな欲求になり課題になっているか、という場面にまず定位することが必要です。それが僕の場合の考え方の原則です。

問題は、「近代」や「資本主義」の大きなシス

テムにひどい矛盾があり、誰もそれに気づいているが、そこに根本的なプランを構想できるかどうかということですね。近代も資本主義もそれからグローバリズムも難問です。われわれはそれに大きな疑いをもっている。しかし繰り返すと、僕の基本の考えは「近代社会」の原理、つまり各人の「自由」の条件を少しずつあげてゆくためのシステム、という基本原理は、これをとことん追いつめて考えて、根本的な代替プランはないということです。われわれがこの2世紀の間見てきたのは、「自由」が進展するプロセスで巨大な矛盾が生みだされてきたということです。だからこれを根本的に打ち返すような考えに、どうしても導かれる。しかし、じつはそうではない。近代社会の原理を、もう一度その理念を立て直しながら少しずつでも押し進めるという以上の方法はどこにもない。それが僕がいま持っている結論です。

僕は「近代」というものをこんな具合に考えています。近代以降の人間の歴史は、いわばひどく長い列車がのろのろと進んでいるようなものなのです。

一番先頭の列車にいる人間は恐ろしく豊かで、そこでは「自由」はありふれすぎたものになり、むしろ自由な自己決定を強いられているということが、人々の生きる苦しみの大きな原因だと感じられていさえする。片や、一番尻尾の方の列車では、人々はまずひどい貧困と悲惨な状態があり、また古い制度や因襲に固く縛りつけられている。

また多く専制的な圧制の中であって、最も基本的な自由の一片すら持たずに苦しんでいる。この近代という列車の頭と尻尾の格差は、この100年のうちに恐ろしく伸びきって恐ろしい状態にまで達している。悲惨な条件にある人々の苦しみがあまりに大きいために先進国の人間の悩みなどは贅沢なものに見えるし、また一方が他方の苦しみをくり出している原因であるかのように見える。両極は構造としてきびしく対立しており、この対立は排他的かつ背反的なものだと見える。だから、そういう人間社会のシステム全体が根本的に悪いものだと考えたくなる。ここ20年ほどわれわれはずっとそういう世界観の中にいたし、そういう

観点はますます深刻さを増している。しかしそうではないと思います。

僕の考えは、各人の「自由」の条件をあげてゆくという近代社会の基本プランは、それがどれほどやっかいな矛盾を生み出してきたとしても、これを根本的に変更しようとするともっとひどい矛盾を作り出すようなものだということです。いま世界という列車は、格差が長く伸びきり恐ろしく不公平な列車になっているが、しかし、にもかかわらず、それが進んでいく方向自体には大きな必然性がある、その軌道を変えることはできない。そこには正当性があると考えます。後ろの車両にいる人間は少しでも前の方の車両に進んでいきたい。前の車両にいる人は、豊かさなんてやっかいなもので煎じ詰めると人間を不幸にするのではないかと考えたりするが、しかし実際に後ろの車両のほうに戻りたいという人は決していない。そのことが人間の本質的な生の欲求のあり方について、何かをわれわれに教えている。それが1つです。

#### 社会の原理は複数の「ゲーム」であること

第2に言いたいことは、近代社会を押し進めてゆく上での基本の理念です。僕の考えの基本形は、社会というものを「ルールゲーム」(ルール原則社会)として積極的に自覚するというものです。社会とは、個々の成員以外にはどんな超越項も存在しないルールゲームだと考えること。これが1つです。もう1つは、社会内のゲームは単数ではなく、多様なものでなければならないことです。

社会は「ゲーム」であるという考えは、思いつきのように思えるかもしれないし、また比喻のように思えるかもしれませんが。しかし僕の考えでは、「社会」の本質を考えるときに、家的共同体や有機体や機能構造体や創発的構造であると見るような、いわば実証的なモデルは役に立たない。なぜかという、社会が歴史的にみてどれほど巨大な動かしがたい硬化したシステムになる場合があると、そのことにかかわらず社会の人間主体を単位とした関係の網の目であるということが基本原理だからです。この関係の本質を論理的に取り

出せば「ゲーム」という概念が最もその本質を表示できると思います。

それと言うと、これまでの社会は例えば武力のゲーム、権力のゲーム、マネーゲームという、1つの中心的ゲームが社会全体を支配していた。この場合そのゲームのルール権限を支配するものが専制権力をにぎるわけです。人間と社会の基本関係で言うと、まずルール権限が特権的な超越項から剥奪されて、成員全員に権限が分散されるということが近代社会の1つの大きな目標だった。これは個々人の基本的な自由と対等の確保という目標です。もう1つの公準は、社会のゲームの中心性が分散して多様化することです。たとえば経済ゲームという1つのゲームの威力が圧倒的であるほど、人間はきびしい経済競争の中に巻き込まれるほかない。それが権力ゲームであればもっとたちの悪い専制国家になります。社会ゲームの多様化の度合いが高まるほど、「生き方の自己決定」における「自由」の度合いが高くなるわけです。これが基本のコンセプトです。近代社会がそのような方向に進んでいくためには、解いていくべき課題が山とあるけれど基本はその方向へ進むのが妥当です。

この問題を少しつなげて言うと、いま宮台さんがローティの話をされたけれど、アメリカの社会学には、ポストモダン思想と違って新しい社会構想の思想が少しずつ出てきた。これはよい傾向だと思います。ローティのほかに、『正義論』を書いたロールズとか、最大限個人の自由を尊重する自由主義（リバタリアニズム）のノージックなどがある。ただローティについて言うと、彼は基本的にはリベラルで、右と左のほかの可能性については一線を引いている。その点では同じ立場です。しかし彼の「入れ替え可能性」、自分が相手の立場に立ったとしてもそれを納得できるかというプランは、僕の考えでは、『正義論』でのロールズの、人間が「ヨーイドン」で生活を始めるとしてどういう初発のルールが正義の「正当性」として想定されるべきか、という発想とほぼ似ています。リバタリアニズムのノージックも『アナキー・国家・ユートピア』で、国家の「正当性」という

概念で似た問題を提起している。

こういう社会構想の試みは大枠として評価すべきものです。しかし僕の考えでは、ローティやロールズほかのプランは基本的にやや理想的だと思います。これについては、ジョン・スチュアート・ミルの興味深い考え方があります。

ミルは『功利主義論』で、やはり「正義」の公準の設定についてイギリスで起きたつぎのような議論をあげます。「共同的産業組織において、才能や熟練が高い報酬を受ける資格をもつということは正しいか」というのが問題ですが、ある論者は、能力は偶然的であり各人の責任でないから、すべての人は同じ報酬をうけるべきである、と主張し、べつの論者は、社会はより大きな才能や技術からより大きな貢献を受けるので、そういう貢献や努力の差を無視するのは「一種の強奪」であって、とうてい正義とは言えないと主張する。ミルの考えはこうです。両者は、「一方は、個人が何を受け取るのが正しいか」に重点をおき、他方は「社会が何を与えるのが正しいか」を優先する。どちらも「自分の観点からは、反論の余地がない」のだが、またどちらも自分の優位性を決定的に証明することはできない。また正義のこの2つの側面は、それを調和させることが不可能なものであると。

ちなみにロールズの「正義」の主張は、同じ人間の間で大きな格差はあるべきでないという考えが公準になっており、ノージックの国家の「正当性」の主張は、個人の「自由」の権利が公権力に優先すべきだということが公準になっている。つまり、ほとんど「個人が何を受け取るのが正しいか」と「社会が何を与えるのが正しいか」という観点の対立に重なっているのです。

#### 「理想類型」的思考と「原理」的思考

僕の考えを言うと、現在、リベラリズムは、資本主義と国民国家のいろんな矛盾を乗り越えようとしてさまざまな改善プランを出していますが（それ自体はとても重要なことですが）、このとき互いの構想やプランが対立して「調停不可能」であるような場合、その構想やプランは思想的に可

能性がないということです。それはどこかで理想類型に近づいているのです。といってそれらのプランがすべて間違っているというようなことではない。「入れ替え可能性」「始発点の平等の想定」「個人の自由の絶対権限」といった考えは、おそらくそれぞれ大きな理を含んでいるのだけれど、それが調停可能になる場所まで、前提を遡らなくてはならない。そこでそれぞれの強調点の別れが何に由来し、どこに調停のルールが設定されるかが取り出されないといけない。哲学の考えはそういう考えなのです。

近代哲学にはこういう社会構想の長い歴史がある。近代社会の社会正義の規準を初めに設定しようとした代表選手はロック、次にルソー、そしてカントです。彼らの考えの基本は、人間はみな自由で平等だという前提であって、興味深いことに「始発点の平等」契約説やその変奏としての「入れ替え可能性」や、「個人の自由」の絶対的確保という理念は、ほぼこの時点の前提に入っています。しかしヘーゲルは、これらの考えはまだ理念の理想性から抜け切っていないと考えた。ヘーゲルの考えのポイントは、「人間は自由である」という理想的理念だけでは不十分なので、思想はそれを実現するための条件を確定する仕事である、ということです。要約的に言うと、ヘーゲルの考えは、人間は本来「自由」なのでもないし、「自由」に生まれついているのでもない。ただ人間は条件があれば必ず「自由」を求めるような存在である。またそのことが決定的に重要だという考えです。ヘーゲルによれば事態は逆説的です。人間はだれも自分の自由を求める。まさしくその理由で、人間社会は普遍的な「主と奴の生死を賭けたたたかい」の状態になり、その結果としてつねに支配社会、権力社会が成立してきた。各人が「自由」を確保する原理的条件はたった1つで、「自由の相互承認」ということだけだ、というのです。ところが、「自由の相互承認」は、相互的な意志や善意の啓蒙や普及ということでは決して実現しない。極端に言うと、99%の人間が自由の「相互承認」を欲しても、1%の人間が、「支配をめぐる生死をかけたたたかい」をいどめば、その社会は

普遍的闘争の社会になるのです。ホッブズが言っているのは歴史的事実ではなく、そういう哲学的原理です。「自由の相互承認」を現実的に確保するものは、個別的な意志ではなく、制度だけです。そして「市民社会」を基礎理念とする「近代国家」がその制度なのです。近代哲学が作り出した社会原理とはそういうものです。

もちろん現実の「近代国家」はなかなかそのようにはならなかった。それにはいくつかの根本的理由があります。しかしそれについては少し後回しにします。重要なのは、ホッブズからヘーゲルにまでいたる近代哲学の社会原理は、われわれが思う以上に、理想化やロマン性を超えて現実条件を取り出そうとする原理的思考の結果であるということです。

ルソーの「社会契約説」は、一般的には自由な個人の契約による国家の設立という原理として考えられています。しかしそれだとずいぶんロマンティックな考えです。実際ルソー批判は、そんな契約など事実としてはどこにもなかったという批判と、もう1つはここまではよかったがルソーは国家権力を「一般意志」の概念で過剰に擁護した、というものです。しかしこのような批判は、哲学的には失格です。ルソーが『社会契約論』でまず強調しているのは、どんな権力も実力によっては決して成立しない、権力の唯一の源泉は「合意」(convention)だけだ、ということです。これもみごとな原理です。近代になって人間は、じつは王も貴族も平民もみな同じ人間だったという観念をもった。これを裏付けたのは、じつは生物学や解剖学や自然科学や数学や経済学です。このとき人は、王が王だったのは大多数がそう考えていたからにすぎなかった、つまりそういう幻想の「合意」をもっていたからだ、という理解をもった。ここにルソーの社会契約説と、ホッブズやロックのそれとの決定的な違いがあります。人々が権力についていったんそういう自覚をもつ。するとこの「幻想的合意」はもはや二度と大きな規模では成立しない。各人は自由な存在であり、権力と権威の特権的、超越的源泉は世界のどこにも存在しない。人間のこの自己理解は、一度成立すると決



して逆転しえないものです。すると社会は個人人の「合意」による集合体ということになり、その政治権限の正当性はただ1つのものに根拠づけられることになる。社会の成員の対等な政治権限を指標するものとしての「一般意志」です。なんど考えても、どのように考えても、権威と権力の超越的源泉というものを取り扱う以上、これが唯一の解です。だからこれが教権政治(教義権力)に代わる、近代社会の政治権限の唯一の原理なのです。

いま、これ以上言いませんが、僕が社会の本質を「ゲーム」の概念でとらえるのは、まさしくこのためです。このゲームは、ルール決定の特権者が存在せず、ルールを固定化すべき根拠をもたず、特権的審判者を置く理由をもたない、そのようなルールゲーム、各人が対等なプレーヤーであることを認め合うことを、ゲームの進行の唯一の正当性の根拠とするような社会ゲームであること。これが近代社会の基本原則です。たしかに僕の言うことはまだるっこしいかも知れません。しかし要点は簡単です。いま、基本的には自由なゲームとして始発した「近代社会」(近代国家)のさまざまな矛盾を克服には、この始発点の原理を十分自覚し、その上で対立する諸プランから共約可能な条件を取り出すような考え方以外にはないということです。

詳しく論証できませんが、いま言ったような観点から見ると、現在のアメリカの社会学の政治理論は、基本的にはロックやカントの原理の場面では社会「正義」の規準を取り出していないというのが僕の考えです。伝統哲学の主観的な真理概念に変えて、「対話的理性」の考えをリベラルな公共性の基礎概念に置こうとしているドイツのハーバーマスも同じです。その先まで進む必要があると思います(これについては、このシンポジウムの後『群像』2003年8月号掲載の論文「絶対知と欲望」で詳しく展開した)。

## 二重の視線の必要

3番目に言いたいのは、現在この近代社会の基本原則をどう生かすかという問題です。これもたくさんは言えません。1つは、「近代社会」の原

理がそれほどよいものなら、なぜこんなひどい状態になっているのだ、という疑問が出てくると思います。これに簡単な答えをおくと、各人の「自由」を解放し、生の自己決定の条件をできるだけ高めてゆく、という近代社会の原理、それを制度的に保証するものである近代国家が、現実にはきわめて矛盾に満ちた形でしかこのプロセスを進めなかった一番大きな原因は、近代国家が、資本主義の論理によって激しい国家間競争の時代に入ったためだということです。あまりそう思われていませんが「近代国家」は、基本の理念は、身分制度を解体して各人の「自由」を確保するためのシステムです。それまで各人の「自由」を保証し確保する根拠は何もなかった。近代国家の「法」だけがそれを確保するように進んできたのです。ところが近代国家同士が激しく競争すると、国家はまず自己維持と自己拡張ということを至上命題として要請されます。むしろ十九世紀から20世紀にかけての欧米列強が戦争機械(ドゥルーズ)になったのです。「国家」の機能は、各人の自由の条件を確保し高めてゆくどころか、各人の自由のエネルギーを国家の勢力を強化するために動員するためのものとなった。だから、近代社会の原理が本来の力を取りもどすためには、「近代国家」同士がはげしい競争を行わなければならないその条件が徐々に引き下げられてゆくことがまず第1の課題です。

このことは、いろんなでこぼこを経験しながらもしかし20世紀の後半になって、ようやく少しずつ条件が見えてきたという状態なのです。一国家、一社会の「自由」の条件を高めてゆくための諸問題は、まずこの国家間競争の論理という外的条件に規定されている。この二重の視線が必要だということです。

しかし強調したいのは、国家どうしの競争原理はきわめてゆっくりとしたスパンでしかその緊張を解いていかない。だからわれわれは絶望に陥りやすいということです。社会の中の諸矛盾を考えると必ず国際社会が抱えている解きたい難問や困難が視野に入ってくる。すると、この2つのことはよじれあって何か「近代」や「自由」や「市民

社会」とは根本的に異なった構想が必要であるような気がしてくる。でも僕の考えは、この2つの問題をしっかり区別することで、はじめてそれぞれの課題と条件が明確になるし、それが明瞭にならないければ「合意」が現われる可能性もきわめて小さいということです。近代社会は各人を対等な権限をもったプレーヤーと認め合う開かれたルールゲームである、という考えは、このよじれが解きほぐせないとそれこそ理想主義的な絵空事と見えるわけです。

しかし強調したいのは、近代社会の構想としては、それ以外に基本原則はないということです。哲学は一応そういう言語ゲームですから、近代と現代に現われたさまざまな社会構想が、原理的にどういう形をとっているかはほぼすべて検討した上で言っているのです。資本主義を、流通手段を修正することで変更できるというプランや、消費者の同盟や、弱者、マイノリティの連帯や、その他さまざまな考えが出てきていますが、僕の見るかぎりいまのところどれも、いま述べてきたような近代社会の原理を暗黙の土台にしているか、あるいは思い切って、マルクス主義的原則を隠し味にしているかのどちらかです。それは論理構成を注意すれば分かることです。ですから僕の言い方はどうしても極端なものに見えるかもしれませんが、要は、近代社会の「自由」の相互確保という社会原則を基礎として、このことをはっきり自覚した上で、もう一度すべてを立て直すのがよい、ということです。

人間のエロスの本質は、やはりゲームのエロスなのです。ゲームのエロスはルールの相互承認を土台とする幻想的なものです。どこにも実体はない。競争があり、成功する可能性と失敗する可能性が未定なものとしてあり、そのために存在可能が開けている。でも一切が偶然なのではない。努力や工夫や神頼みといった要素がある。目標の多義性、手段の多様性、そのことからくる決定の不確定性と判断の余地、努力と成果の絶対的でない相関性、そういったものがゲームのエロスの中核をなすものですが、近代社会が開いたのはそのような生のゲームのエロス性です。しかしそれは現

在恐ろしく不合理なものになってしまった。中心的ゲームの単一性や敗者復活の余地のなさ、成功者と敗者の流動性のなさ、手段の一義性、これらのことは、すべてそのゲームを生きる人間の「自由」の感度を削り取るような要素です。これらの要素を持続的に改変してゆくことができるかどうか。つまり、もし近代社会が「自由の相互承認」にもとづくフェアなルールゲームだとすると、近代社会は現在それ自身が作り出してきた大きな矛盾を、自己浄化し、自己修正する原理をもっているかどうか。哲学的に言えば、これが最も重要な問いになるわけです。

加藤 ありがとうございます。最後に、見田さんいかがでしょうか。

## 法学的な思考と社会的な思考

見田 それでは4人の方々のお話を伺って、先ほど加藤さんが言われたようなそれぞれの関係はどうなっているのかということについて、考えたことを少し述べてみることにします。

思い出したことからお話しすれば、今日のテーマは「国家と社会」ということで、『国家学会雑誌』という雑誌が日本にはあるんです。あれは、法学の雑誌なんです。それが国家学というか、法的な思考と考え方と、社会的な思考というのが決して矛盾はしなくて両方とも必要なものなんですけど、役割が違うということも1つ、国家学と国家の問題は同じではないですけどね。今日の問題を考えるうえで、具体的に手がかりになるような気もしたわけです。

問題を整理する手がかりになるような気がしたんですが、例えば問題の中心にぐさっといきなりいきますと、要するにテロリズムというものをどうやってなくしたらいいか。どうやって克服できるかということが問題の焦点だと思うんですが、そのことを考えるときに、つまりそういうルール違反というものは、テロリズムというのは全くのルール違反ですから、しかも全くひどいルール違反ですから、これは殺人罪です。それで厳しく処罰しなくてはいけないという考え方がある。それ

は正しいわけです。そのとおりで、ルール違反のものを放っておいたらルールは成り立ちませんから、全く正しい。正しいということは、法学的に正しい解決なんです。

そうなのですが、しかし今、昨年(9・11)以後起こっていることは、処罰するぞと言っても、処罰を恐れずにテロをやる人間がいっぱいいて、それはどんなに重い死刑にしても、自爆するつもりなわけですから、現実にもそういう人が出てきてしまうわけです。

ルール違反だから徹底的に処罰しろというのは正しいのですが、それは法学的な正しさであって、それをすることによってテロはなくなるわけではありません。つまり、いくら処罰してもなくなるわけです。それをどう解決するかということが社会学の課題なのです。それはとても難しい課題です。

それは社会学としては、いくら処罰するぞと言ってもやっぱり起こっちゃうと。それをどうなくするかということが、僕は本当にキリスト教も仏教もすぐれた思想だとは思いますが、ただ、それでは解決できなかった問題なので、それを社会学に押し付けられても困るだけけれども、社会学の方はそこから逃げるわけにはいかないんです。だけど、まだ解決しないんです。法学的に正しい解決が一応できて、社会学の問題が残るといえることがある。

それからもう1つは、似たようなことですけど、もう1つ例を挙げると、例えばテロリズムと戦争は違うと。ブッシュのやったことは宣戦布告もあって、いわば合法的な戦争であるということも、実は正しい、本当はそうなんです。つまり、暴力というのは国家だけがふるってもいいというのは、国家というシステムの原則ですよ。つまり、法学的に言えば、テロリズムは悪いけど、国家はテロというか、暴力をやってもいいんだということは、やっぱり正しいんです。国家システムの原則で今の支配的な法学はできていますから、そうなのです。それが国家の現在のシステムの原理なのです。

だけれども、そのことがつまり、暴力をふるっていいのは国家だけなんだぞという原則は、今の

国家の原則であって、法学的に正しいのだけど、そのことが実際に社会的に実現するには、あるいは行われるためには、市民がそのことに納得しないと、ちょっと嫌だけど、やっぱり納得するよということがないと、それは実際に成り立たなくなる。それに納得しない、国家だけが暴力をふるってもいいんだ、ほかの人はだめなんだという原則に納得しない人間、特に激しく納得しない人間を、大量に生み出してしまうような国際社会というのが今現実にあるということがあるわけです。

これはやっぱりどこかおかしい。そういう社会というものの、つまりテロリストやそれに共感する人たちを世界の中に、国際社会の構造の中に大量に生み出してしまうような世界社会の構造というものをどうやって変えていくことができるかということ。これも現代の社会学の課題です。法学的にテロは不法だけど、国家のやる戦争は合法だからいいんだと言っただけでは、現実問題は解決しないわけです。やっぱりそのことに納得しない人を激しく生み出してしまうような、世界社会の構造をどうするかということを考えるのが社会学というものの課題です。

それから——このくらいでやめましょうか。一応やめておきます。

#### 再度の質問

加藤 今4人の方にお話を伺ったのですが、司会からの質問と、また、先に3人の方に見田さんの発表についての感想をお願いしていた点は、お答えいただいたのではないかと思います。

お答えを聞いての僕の感想をここに差し挟ませてもらいますと、橋爪さんの出されたロシアの問題では、国家は最大限努力をしたうえでしかし断固としたテロ組織に対策を講じる、その結果多数の死者が出てもいたしかたない、これは常識であると言われたのですが、僕は、ここで聞いている人の多くが、こう感じたのではないと思う、それを代弁するつもりで言うのですが、しかし、ほんとにそれは最大限の努力だったのだろうか、はたして市民はそう納得したか、と言え、疑問が残るのではないか。そのあたりは、見田さんの出さ

このことに対しては、この新しい条件をそこにどう組み込むかと二重の視線で考えていくのだというお答えとして、聞きました。一応問いを出していたので、それとの関係で触れておきます。

次にパネラー相互のやりとりに進みたいのですが、さしあたり、今の見田さんの発言に触れて、橋爪さんに答えていただく必要があるかなと思いますし、社会学の課題という話が出ましたので、この点に関して、宮台さんにもお答えいただけるとうれしいと思います。

#### 「テロをなくす」と「テロをへらす」

橋爪 時間もなくなりつつあるので、簡単にお話しします。

モスクワの件ですけれども、市民は必ずしも納得していないかもしれません。二重の水準があって、ひとつは、もうちょっとうまくやれたんじゃないか、つまり、毒ガスをまくにしても、治療薬を病院に配っておけばよかったとか、いろいろあるのですが、そういうレベルと、もうひとつは、テロリストと取引をすれば、こんなに人質は死ななくてもよかったのではないかというレベル。この2つのレベルがあると思う。そして、その最初のレベルで納得していないんだと思います。テロリストと取引するべきだ、というふうには納得していないとは私は理解していないんですね。

日本は昔、福田内閣のときにダッカ人質事件があって、超法規的に赤軍派の犯人を釈放しました。人質の生命(人間の生命)は地球よりも重いとかいう論理があって、そういう対応をしたんですけど、これは今やテロ支援国家——テロリストと妥協するということはテロ支援国家にほかならない——ですから、そのことだけをもって、例えば同盟関係を打ち切られたり、それから日本の市民の安全が外国で保護されなくなったり、それから政府がふいに攻撃されたりしても、全然文句が言えないということなので、ここはぜひ注意していただきたいと思います。

それから次に、そんなことを言っても、テロリストがなくなるんじゃないかと言う話がありました。私は21世紀というのはテロの時代で、テ

れた問いと重なると思うので、これに相乗りさせてもらい、この点を重ねてお尋ねしたいと思います。見田さん、竹田さんからは、問題の根元を断つことによってテロリズムを根絶するという別の対案の形も出ています。それとの関連で、お願いします。

ついで宮台さんのお答えへの感想ですが、「システム」の外部がその外部性を失い、近代社会を駆動させるシステム内外の連関が浸食されてきているいま、有効なのは、ちょうど冷気摩擦のように、この外部感覚をたえず外部の他者に触れる実践を行うことで励起することだという指摘だったと思います。もしこの人の境遇に生まれてもオーケーかという立場の入れ替え可能性をチェックポイントにして、この仮定の対象をどの範囲に想定するかについての感情のベースを日々広げるべく、コミュニケーションを通じて日々実践することが、近代社会の骨格の1つとしてのリベラリズムを生かすほぼ唯一の道だというお話として、受けとめました。何となく僕なんか古いタイプの人間が聞いていると、「社会がこんなふう変わった」からこれに対して「こんなふうに対応を高度化せよ」というふうな定式をもった話に聞こえます。フランス語で「fuite en avant(前方逃亡)」という言葉があります。相手が進んでいくと、こちらはそれよりも早く進んでいくという形で対応する、相手の進行に沿って、こちらも前に前に移動するのだが、見方を変えると、前方への逃亡とも見えるという言葉です。ローティのプラグマティズムの要諦ということで、なるほど、と思ったのですが、もし、これを別の形で語ってもらおうとどうなるか、ここにいる聴衆の方も、一部は、それを聞いたがっているのではないかと感じます。そのあたりも念頭に置いて次のお話をお願いできればと思います。

あと竹田さんの話は、僕が先にお尋ねした近代社会の「壊れ」をどう受けとめるか、自分の論の構えとの関係で道標化するかという問いには、それでも自由の相互承認によるルール原則という原理は変わらないのであって、ただそのための条件が変わった、今はベースがだいぶ違ってきている。



ロをなくせると思わない方がいい、減らせるだけだと言いたいです。風邪のようなもので、風邪に絶対にかからないようにしようと思ったら、無菌室に入ったり、アレルギー反応を抑えたりと、とても大変です。そうじゃなくて、風邪にはたまにはかかるし、たまにはうんとひどいことになるかもしれない。でも、免疫系が働いていれば概ね生存できるわけです。テロも同じで、テロには未来がないわけです。代替案じゃなくて、ただの破壊活動ですから、多くの人がテロを支持するという事は考えられない。適切にそのつど対処していくことで、テロの数は減らせる。でも、絶対にテロがなくなるということはない。だからいつ、どこでテロが起こってもおかしくないというふうに、認識を切り替えて、必要以上に騒がない。これが私の対処法です。

#### 竹田発言への疑問点

それで、竹田さんと見田さんについての議論があったので、少しだけ、私からの疑問点を提示しておきます。

竹田さんは具体的な理念ではなくて、ルールということを中心に、ルールに問題があれば、1人1票でそれを変えることができる、これが希望であって、これを共通の認識として社会と国家を形成すれば、テロのようなものは起こらない、という感じで述べられたんですね。

私は、基本的にそういう考え方なので、支持するんですが、しかし9・11以後の問題は、こうした問題設定を超えていると思うんですよ。どうしてかという、国際社会にはそういう共通のルールがない。国際法があるけど、それは国内に通じているわけではないわけです。そして、1人1票のような政治システムは、近代国家の内部では、かろうじてあちこちできているけれど、国際社会にそういうものがあるわけでもありません。ですから、国際社会の中にある矛盾を解決するアイデアとして、一番優れたものはルール主義であろうけれども、それでも解決できないという問題があるんですね。

#### 「収奪」と「抑圧」と呼べるのか

見田さんがいろいろとおっしゃっている、テロをなくしていくことが社会的課題かどうか知りませんが、そういう課題は、このルール主義を当然持ち込むんです。けれども、それプラス何かということがあるんじゃないか。

それから見田先生についての、私の疑問は、今日のお話も大変おもしろかったですけれども、しかし「収奪」とか「抑圧」とかいう言い方がありました。圧倒的な不合理とかどうしようもない不平等とか、そういう感覚は、私たちの間、世界の中にいろいろと拡散しているし、それはリアリティを持っているということは私もわかるんですけど、それを「収奪」とか「抑圧」とかと簡単に呼べるのか。マルクス主義はそういうふうには呼んできたわけですけど、これは非常に微妙だと思います。

例えば人口を考えてみます。今、65億の人口がいます。これは、先進的な工業力がなければとても支えられない人口です。もしも伝統的な社会だったら、地球上は数億人でいっぱいなわけです。すでにこのように存在している人たちの、生命、財産、人権を保障するシステムは、先進的な工業力、つまり先進国の協力がなければ不可能なわけです。第三世界はそういう意味で、先進国に依存している。その象徴がアメリカだとすれば、アメリカが存在しなければ、第三世界は存在できない。搾取しているとか抑圧しているという以上に、相互依存していてひとつのシステムになっているんです。ですから、宮台さんが言ったように、アメリカに適切に行動してもらい、先進国に適切に行動してもらい、我々が賢明に行動するというのを具体的に考えていかなければ、その搾取とか抑圧かというターミノロジーでは、ちょっとスケッチとして粗いのではないかというのが私の直観です。

#### なぜアメリカは強いのか

そのアメリカというものを考えてみたいんですが、これはお配りしたプリントの中に書いてあって、報告では言及しませんでした、アメリカと

いう国が生まれるのには必然がある。なぜアメリカが強いのか。なぜアメリカのような国家が産業革命のあと2世紀の段階で、現在覇権を握っているのだろう。それは新大陸の国家だからです。

産業革命は旧大陸で起こりました、今までの文化、伝統、蓄積が必要ですから。でも新大陸という空いた場所があって、そこに工業技術を移転し、人間が移転すると、1人当たり、多くの資源を使うことができるので、工業を発展させるのに大変具合がいい。しかも旧世界のさまざまなしがらみがない。そこで旧世界は負けていくわけです。

旧世界はヨーロッパであり、イスラムであり、ロシアであり、インドであり、中国である。1つにまとまれないし、人間も多過ぎるんです。ですから当然、アメリカに追い抜かれ、何歩か遅れて進む。日本もその中にあります。こういう地政学的な状態がしばらく続いていくわけです。

そうすると当然、アメリカが最も自由で世界の文明をリードし、そして軍事力も強大で世界の秩序の安定に寄与する。旧世界の中にはいろいろな矛盾があって、すぐ対立しますが、結局アメリカが介入しないと平和が維持できない。こういう現実が現れるわけです。

これは残念ながら現状なので、これをひっくり返してもろくなことがない。ですからこれで行くしかないんですけど、しかしそれが矛盾を生産しているという面もあるわけです。そのアメリカに対して、日本の立場から、いろいろと介入していくという、そういう現実的なやり方を積み重ねていく。プラグマチックなやり方しかない。プラグマチズムというのは、オポチュニズムと違った、こういうバランス感覚です。アメリカもだんだん地盤沈下していくわけですから、長期的な視野を持って、そのつど、そのつど最善の手を打っていく。こういう蓄積は、時間はかかるけれども、テロリズムに対する一番現実的な方策ではないかと私は思います。

加藤 ありがとうございます。質問にしっかり答えていただいたと思います。では次に、宮台さんお願いします。

#### 「力と美」をめぐる逆説

宮台 中国や朝鮮半島の方々にとって、日本のアジア主義は悪夢でした。なぜ悪夢を来したのかを理解することは、今日のアメリカのあり方を考えるのに役立つので、「力と美」という岡倉天心の二項図式を使って概念的に説明します。

彼の図式は「西洋列強は文字通り力を持ち、力なき東洋は美を共有する」というものです。各地を歴訪してアジアの多様生を知り尽くしていた彼のことで、廣松渉が西洋のアトミズムにアジア的關係主義を対比させたのと同じで、美の共有うんぬんは、外部の力による脅威を前提にしたネタです。その意味で、社会的に言えば、同一の力に抑圧された弱者たちの感情的な共通前提のごときものです。「力に抑圧された弱者は、美によって連帯し、力の獲得に向けて自らを鼓舞すべし」。わかりやすくいえばそういう図式です。

ところが、とりわけ日露戦争以降の歴史には「力と美」をめぐる逆説的事態が見てとれます。主に2つある。第1に、戦後を見ると、我々が力を獲得して弱者でなくなった結果、弱者としての感情的な共通前提を失い、三島由紀夫が憂えたごとく、擬似的にせよ何にせよ維持されてきた共同性が潰えます。拙著『まぼろしの郊外』(1997年)に書いた通り、似た問題は随所にあります。強いられた弱者として「核抜き本土並み」を目指してきた沖縄は、とりわけ90年代以降、単に本土並み化して力を獲得するだけでは美を失ってしまうとの意識を共有するようになります。在日コリアンの世界でも、単に日本人化して力を獲得するだけでは美を失うとの意識が出てきている。被差別弱者ゆえに「快樂の共生」を有するゲイは、それゆえに、レズビアン&ゲイ・パレードのごとき熱い祭りができて、それが異性愛者にリスペクトされ、ゲイの力の獲得に資するところ大ですが、このまま異性愛者並み化すれば、いずれは祭りの前提たる「快樂の共生性」が失われます。

そこに第2の問題がある。力の獲得にかかわらず美を維持する方策、ありやなきや。あります。力の獲得にもかかわらず自らを弱者として規定し

続ければよい。ところが、それこそ、そもそもは岡倉天心的な弱者の思想だったアジア主義が、帝国主義的な大陸進出の翼賛思想に成り下がるプロセスそのものなのです。1943年の重光外相の大東亜憲章に象徴されるようにアジア主義が悪魔の思想に変じたゆえんです。すでに力を獲得せし者が、弱者たる過去の記憶にしたがって美的に自らを鼓舞する国粋の営みのいかに恐ろしきことか。それがまさにアメリカそのものなのですが、その前に、イスラエルを見ましょう。

#### アメリカとイスラエルの事例

イスラエル人は中東戦争といえば、エジプトにめっちゃくちゃやられた第1次中東戦争を思い出します。イスラエルには、遡ればホロコーストの記憶があり、さらに遡ればヨーロッパのキリスト教徒によるユダヤ迫害の歴史的記憶があります。東欧崩壊後も、差別されていた大量のユダヤ人がイスラエルに移住し、イスラエル右派を形成します。彼らはいまも自らが弱者であるとの意識を強烈に抱き、自らを美的に鼓舞する。しかしどうでしょう。いまでは弱者どころか、むしろ強者ではないのか。

すでに力を獲得せし者が、弱者たる記憶を手放さないことの恐ろしさといえば、かかるイスラエルのあり方こそがまさにアメリカの写し絵です。全米ライフル協会やミリシアの戯画を見るまでもなく、この国は今でも連邦派と反連邦派の対立構図を引きずる。140年前には親族や友人が南北に分かれてゲリラ戦で殺し合ったことを思えば、国をなすこと自体が奇跡的です。この奇跡は、南北戦争を挟む米英戦争や米西戦争、遡ればピルグリム・ファーザーズの迫害記憶やネイティブ・アメリカンによる襲撃記憶など、やはり弱者たる記憶に支えられます。その意味で、列強にやられないよう仕方なく親の敵と結束した維新期の日本を彷彿させる。すでに力を獲得せし者が弱者たる記憶にすがる滑稽さは、マイケル・ムーア監督のドキュメンタリー映画『ボウリング・フォー・コロンバイン』（2003年1月に日本公開）に活写されています。

弱者たることを動機づけのリソースとして利用する強者の恐ろしさについて、もう1つ重要なことがある。各種の映画の主題になりましたが、なぜ日系人やネイティブ・ナバホが星条旗の下での兵士たらんと欲するか。これは被差別者の運動が、黒人の公民権運動にしても、女性のフェミニズム運動にしても、少なくとも当初は合衆国憲法を自らにも適用してくれという形式をとることに関連します。逆にいえば、合衆国憲法の適用を受ける恩恵はそれほど大きい。だから、自分たちも人権ゲームに混ぜてくれとの運動が起こると同時に、他方で、混ぜてやってもいいが星条旗のために死ぬのかという形で「踏み絵」を踏ませ、戦争動員してきたわけです。

かくしてアメリカは、弱者たる記憶や自意識を利用して、内部的な結束や、外部への動員を図る、長い歴史があります。これをどう解除するか。解除に至らなくても、「強国になった弱者」「強国の中の弱者」の思考停止的な突進を、いかに抑止するのか。それが21世紀の重要な課題になっている。その意味では、かつて原型的な弱点をさらしたアジア主義は「強国になった弱者」の問題を、宮崎学が『近代の奈落』（解放出版社、2002年）で描いた水平運動とアジア主義的動員の関連は「強国の中の弱者」の問題を、すでに教訓的に示しているわけです。

#### 「対応の高度化」について

さて、システムに対する対応の高度化というとき、まるでシステムを超える知性が必要であるかのような印象を皆さん抱くとすれば、それは違います。そうではなく、システムに対して反省的な距離を取るということに尽きます。

例えば、さっきの軍事経済ブロックという発想は、皆さんご存じのようにEU統合の非常に大きな動機づけになっています。これにはアメリカニズムやグローバルイゼーションに対抗するという大義名分があり、それを多くの欧州人が共有しました。

それは今日も継承されていて、イタリアのスロー・ライフやスロー・フードの運動になったり、フラ

ンスにおけるマクドナルド排斥運動になったりするわけです。確かにアメリカン・ウェイ・オブ・ライフは便利だけれども、便利さを追求するだけだったら俺たちは透明で入れ替え可能な存在になってしまう。そういう状況を回避しようとする文化防衛論——文化防衛論の十八番も実は日本なんです——文化防衛論的な発想に基づいて、EU統合の動機づけが与えられていたわけです。

しかし、EU統合が現実化すると、直ちに、EUの公益を語りつつ国家益を追求している国はどこかということが問題になり、ドイツが足を引っ張られたりしたわけです。あるいは経済的な沈下ゆえに存在する、増えていく移民に対する反ユダヤ主義的感情の増大も、EU統合によってむしろ顕在化している。

ここには、イスラエルが被害感情ゆえに強硬路線を取れば取るほど、ヨーロッパでは反ユダヤ主義的な運動が高まって、それによってイスラエルがますます被害的な感情を高めていくという悪循環も生じている。

何が起きているかを見きわめて、適切な手を取ることで、近代社会に関わり続けるしかない我々に残された、ただ1つの道です。ただ、その場合にも、だれがシステムを設計するのかとか、だれがシステムを反省的に把握して何かをしようと動機づけられるか、という問題が最後まで残ります。

#### 新しい社会運動

そこについて、最後に1つだけ、希望的な観測を申しあげます。先日、9・11メモリアルでいくつかのNGOイベントがあり、僕も参加しました。これらは新しい社会運動です。新しい社会運動とは何か。旧来の運動は、剥奪された弱者が自らの回復を求めて立ちあがるか、近隣の弱者に連帯するというタイプでした。新しいタイプの運動はそれとは違う。

ちなみに僕たちの社会は旧来の運動では解決できない課題を多数背負います。例えば環境問題。かつてと違って、フロンガスによるオゾン層破壊にしても、遺伝子組み換え作物によるエコロジカ

ル・システムの攪乱にしても、僕たちが被害を受けるというよりは、子孫たちの問題なのです。僕たち自身は食い逃げややり逃げができます。同じく、例えばグローバルイゼーション。ハンバーガーを60円で食べる時に地球の裏側で何が起きているのか、ふだんの生活で意識する機会はないでしょう。テロが起こってさえ、そういう問題を想像できない輩が大半なのです。

僕たちは弱者というよりも、見えない場所の見えない人間たちに、あるいは遠い将来の子孫たちに、理不尽な思いをさせる強者なのです。ちなみに見田先生の『現代社会の理論』は、空間的・時間的に遠隔の人間を思うべしとの当為が不可能であることを前提として、遠隔の人間たちに負担をかけないシステムを構想し、設計する可能性に、賭けようとしています。

ところで、かかる当為とは別に、決して会うことのない子孫や南側の人々に理不尽な負担を強いるシステムにタダ乗りするのは枕を高くして眠れないとか、内心忸怩たるものを抱えたままでは生きられないと感じる者たちが、自分がシステムの入替え可能なリレー・スイッチになりゆくことを拒否する心情を実存的に抱えつつ、社会運動する動きが出てきています。

それが新しい社会運動です。その動機づけは、弱者の自己回復ではなく、近隣弱者への連帯でもなく、エゴイズムを放棄すべしとの当為に依るのでもなく、今述べたような強者たる者の実存的理由——まさにエゴ——に発します。現実には、かかる者たちによる公共性の模索行動なくして、グローバルイゼーションの逆機能問題に対処するのは、不可能になりつつあります。皮肉にもこうした動機づけはアメリカでこそ量産されます。

加藤 どうもありがとうございました。宮台さんにも質問に答えていただいたと思います。ここで見田さん、橋爪さんからの批判にお答えいただけますでしょうか。

#### 「収奪」と世界社会の構造

見田 じゃあ、ちょっと橋爪さんの批判にお答え



いたします。「収奪」とか「抑圧」という言葉が僕が言うのは、スケッチとして粗いのではないかというご批判は、正しいと思います。まことに粗いんです。ただなぜ粗いかというと、それは時間という公共財が大事であってなぜアメリカがどういうふうに収奪しているかということ、ここであらためて言っていると長くなるので、橋爪さんが模範的に守ってくださっているような、時間をなるべく短くするというので、そこを省いたので粗くなったんです。

うんと短くだけ言うと、例えばアフリカなり中南米なり、いろいろな世界の国々で飢えたりしているというのは、彼らが昔から食べていた主食とか何かを、作る場所から多くの人々が、つまりいろいろな国々で、現地の人々の主食を作っている場所というのが、非常に多くのところで、先進国向けの商品作物とかそういったものを作るために追い払われて、土地の最もゆたかな部分は商品作物化されて、そのいいところで作られるものというのは、大体、豊かな国の人々が食べるおいしいもの、チョコレートとか砂糖とかフルーツとかそういったものになっていって、現地人常食のための生産地は多くの場合、限界生産地、自然条件のよくないところに追いやられているわけです。

そうすると、その限界生産地、気象条件が悪いところとか、地面のやせたところとかそういうところは、自然災害の影響を受けやすいからちょっと干ばつがあるとすぐにたくさんの人が飢えたり、豪雨があると飢えたりする。日本などで報道されるときには、自然災害だということで報道されるわけです。確かに直接にはそれは洪水だったり、干ばつで何千人が飢え死ぬわけですね。だからかわいそうだなということだけを日本人は思っているんですけど、もともとそういうことを受けやすいところに、限界生産地に追いやられているという世界社会の構造が背景にあることが多いわけです。

そういうことの商品作物化で買い取っている部分というのは、国境をこえたアグリビジネスとか、大体现地の支配層と手を結んでいて、そういったものに対してそれは困るというような、例えばこ

こは砂糖しか作らないと契約したところで、農民が食べていけないから自分のものを作ったりすると、軍隊によって壊されたりして、それはアグリビジネスと契約している現地の支配者によってですからアメリカの直接の抑圧ではないけれども、現地支配者のそういう形での国際経済のメカニズムによる抑圧が来ているということがあるわけです。

今挙げたのは時間の節約のために1つだけのメカニズムですが、ほかに例えばバングラディッシュの洪水なんかで、あれも自然災害にされていますが、あれは地球温暖化の影響で海面の水位が高まったりして、河口の大デルタの昔から多くの人々が住んでいるところが、海面が高くなってちょっと雨が降ると洪水になるわけです。

だからあれも、日本では洪水の影響で単にかわいそうとなりますけれども、地球温暖化のフロンガスとかそういうを出しているのは、先進国の豊かな社会が圧倒的に出しているわけであって、それは見えない形で、「収奪」と言いたくないかもしれないけれども、見えない形で収奪している部分があるわけです。

「自然災害」とか現地の横暴な支配者の暴力とか原住民同士の悲惨な殺し合いという形態をその末端ではとりながら、豊かな国々の豊かな層による貧しい国々の貧しい層の「約圧」や「収奪」は、構造として、つまりグローバルな経済メカニズムとパワー・ストラクチャーを通して貫徹しているわけです。

そういう世界社会の構造を時間節約的に圧縮して、粗いスケッチで話したわけです。

もちろん、橋爪さんが言われるように恩恵を与えている部分もあるわけです。全部悪いことばかりしているわけじゃなくて、恩恵を与える部分も大きいんですけど、それが恩恵を与える部分と収奪する部分というのは、世界中すべてに対して、6分4分とかいうことでやっているわけではなくて、非常に恩恵を受けている部分もあるけれども、収奪だけされている部分もある。構造的な矛盾やひずみを一方的にしわよせされている部分もまた大きく存在している。その構造的な矛盾や

ひずみが、黒い憎悪や怨恨の心情を生産し、再生産する。そういった部分が、かつどのような有効な打開の手段も封じられた場合に、一部にはテロに訴える部分も出てくる。そういうものが根本的にテロリズムの地盤としてあるわけです。何も追いつめられることがなければ、だれも好き好んで自爆テロなんかを行おうとは思わない。絶望的なところに追い込んでしまう構造があって、そういう構造そのものを変えるということが、根本からテロリズムというのを根絶するただひとつの方法なのです。

これでもまだいろんなことを省略しましたから粗っぱいですけど、取りあえず、一言お答えしました。

#### ギデンズとの関係

それから宮台さんの話に出てきたギデンズとの関係ですが、僕が根底においているのは、世界のあらゆる地域の民衆の自立と自己開放、ということです。このことから考えていけば、ギデンズのような結論にはならないと思う。ギデンズは（少なくともこの場合）、一方的に「近代社会」の側から、インクルージョン（包摂）とかエクスクルージョン（排除）を考えるから、ああいう結論になる。「近代社会」の底が割れた、ということから事態が発生していることの意味を明晰に理解していない。つまり「近代社会」の全体を相対化する視界からしか、解決は見えてこないということがわかっていないと思います。

加藤 ありがとうございます。では竹田さん、お願いします。橋爪さんから質問が出ていたと思います。

#### 「原理」がないと「悲劇」が生まれる

竹田 橋爪さんの質問は、社会を1人1票という原則、つまり成員のすべてが対等の権限者と認め合うという原則で動かしてゆく、この原則は一社会内では基本的に有効だけれど、現在国際社会が直面している問題では、その上にもっと別の原理が必要なのではないかということだったと思いま

す。それはよく分かります。僕なりに言うと、この原理は原則的に政治権限が確立した一社会の内側だけで働くものだからですね。全員の権限でルールを決める。しかしルールを決めただけではそれは実効しない。ルールを破ったときにペナルティを与えることのできる実力がなければ、一部の人間しかルールを守らないからです。近代国家の権力は、基本理念としては成員が決定したルールがしっかり守られ実効しているようにする実力のことです。だから近代国家の権力の正当性の根拠は、そういう力として働いていることであり、これを逸脱した権力は、権力の正当性を失うわけです。近代以前の国家権力の本質は、王(および教会)の権威を聖なるものとして確保するための実力です。その正当性の根拠は、王権や教会権の正統性の承認ということです。両者はぜんぜん違うものです。

ともあれ、近代社会ではいちおう権力がルールを確保するための実効性をもっているのに、ルールは機能しているけれど、国際関係ではこの上位の権力が存在しません。国連のようなゆるやかな合議体があるだけです。またもう1つの問題は、近代社会では個人が自由な主体の単位(場合によっては家族ですが、基本はほとんどの先進国家は個人が単位です)として認められています。国際関係では、諸国家を個人と同じ自由な主体の単位と認めることは簡単でないからです。ですから、さっきも言いましたが、近代国家は、基本的に利益共同体として振る舞い、利害の対立は場合によっては「力」で解決する以外にないことがあるわけです。

はじめにヘーゲルの『精神現象学』でのアンチゴネー論の話をしました。この考えが興味深いのは、人間社会に起こる矛盾は、「原理」がない場合は「悲劇」となるほかないということです。たとえば9・11のテロのような事件で、われわれは一方で貧しい国の人間の大きな絶望の形を直観します。この絶望は、ちょうどアメリカの大統領が専制的国家を「悪の枢軸」と見なすのと正反対に、それは現在の資本主義のあり方やその象徴としてのアメリカを世界の「悪の化身」と見るような感度を作りあげている。ここでは世界は「正義」

と「悪」の区分で考えられていて、両者を調停する「原理」がどこにもありません。どちらかの陣営に属するものはそれを「正義の戦い」や「聖戦」と位置づけますが、どちらの感度にも属さない人間からはそれは「悲劇」です。われわれは近代的なヒューマンイズムの感度をもっているので、「共同体」どうしが対立し、片方が片方を打ち負かしたり征服したりすると、まずたいてい勝者を悪とみなし敗者を善とみなしたくなります。しかしじつはここには、善人と悪人が存在するわけではなくて、ただ「原理」がないということなのです。なぜなら、ここにある構造は、勝者と敗者が逆転する可能性をもつだけで、両者が共存する可能性ははじめからないからです。人類はそういう不可避な「悲劇」を繰り返してきたわけですが、われわれが希望をもつことができるのはただ「原理」を見出したときだけです。

#### カントの根拠とヘーゲルの根拠

これはよく知られたことですが、カントがまず『永久平和論』を書いて、国家間で戦争をなくすることができるし思想はそのような方向に進まなくてはならないと主張しました。ところがヘーゲルは『法の哲学』でこのカントの考えを批判します。カントのような考えはありうべきものではあるが、今の段階では、国家間の間にルールを設定できる原理がない、この「原理」を明示しないままに国家間の永久平和といった理念を言うのは、思想としてはむしろまずい。そこに含まれる理想主義が、現実条件をたどるべき順序を見失わせるからだ、という含みです。僕の考えでは、カントのような考えは、人間の概念が(自由の理念)を介して必ず「世界大」にまで拡大せざるをえないことの結果であって、近代思想としては必然的、かつ本質的なものだと思います。しかしヘーゲルの言い方にも強い説得力がある。これはヘーゲルが当時生きていたプロイセンの状況を知ればいっそうよく理解できるものです。カントの考えは、近代思想が登場した以上必ず人間にとって課題になる問題あり、その意味で大きな先達者ですが、思想を理想から切り離して徹底的に「原理」の問題として追

いつめたヘーゲルも重要なことをわれわれに教えます。

#### 列車の長さを短くすること

現在の富んだ先進資本主義国家と絶望した世界心情を土台としてテロリズムのたたかいは、直観的に言って、当座これを阻止したり、調停したりする「原理」はほとんどないと思います。短いスパンでは手がありません。しかしロングスパンではそうではない。それはある意味ではっきりしていると思います。今日われわれはそれぞれがこの問題についての基本の考えを言ったわけで、それぞれ違いがありました。しかし大きく取れば1つの原則があって、それは現在の南北格差を拡大する資本主義のありようを制御して、この長い列車の両端を縮めてゆくということです。もちろんここにさまざまなプランと構想がありうる。しかし、この格差の拡大が絶望を深めそれがテロリズムを支える理念の土台を強めるということでは、一致があると思います。

そこで僕の考えを率直に言いますと、その諸条件を作り出すための具体的課題と作業がどれほど大きなものでも、基本的には、国際社会を、市民社会的な開かれたルールゲームに近づけてゆくというプロセス以外に、この問題を解いていく「原理」は存在しないと思います。ここにはきわめて多くの課題があります。先進国どうしが利害対立を戦争によって解決する条件は、現在はきわめて小さくなっている。いまは経済競争で代替しているわけです。この国家間の緊張を解いていく他の課題はたくさんあります。経済の回転を緩やかに廻しながら、中進国の層を引き上げつつ、もっと貧しい国が競争に参加できる条件を作り出さないといけない。貧しい国はたいてい専制体制になっているけれど、これを市民化していく条件もあなくてはならない。宗教を政治原理から引き離して個人の信仰の場面で確保しようような受け皿を確保しなくてはならない。先進国による世界の富の独占の比率を持続的に押し下げていかなければならない。国民国家の国境の壁を漸次的に緩やかにして、人間の移動を押し進めてナショナリズム

をますます相対化していかなければならない。伝統的な共同体の生活は緩やかに解体してゆかなければ矛盾が噴出するし、また一方で若者の欲求は前進するので遅すぎてもいけない。そういう諸条件がたくさんあります。そして実際に人々がどのような課題にぶつかっているかをよく見定める仕事は、ある意味で社会学の重要な役割でしょう。ただ、僕の主張の力点は、基本的に近代の「自由」の展開の原理が基礎となる以外にないということです。このことへの理解が形成されなければ、おそらくどんな合意も形成されないと考えます。なぜそれを強調するのかという理由は1つであって、現在われわれは、社会主義の理念が倒れたために、むしろ「近代社会」という理念の価値に対して、ことさら懐疑的になっているからです。

「資本主義」という言葉はもちろんのこと「自由」という概念も、「近代」や「ヨーロッパ」や「アメリカ」という概念とともにきわめて“怪しい”ものになっている。ポストモダン思想は、もともとはマルクス主義を超える思想原理として登場したのに、いまや典型的な“批判主義”思想になっている。つまり構想を作り出す代わりに、この懐疑の力を酷使することで精神の自由の感度を確保するようなものになっている。僕の考えは、シンプルに言うと、「資本主義」は制御され改変されなくてはならないけれど「自由経済システム」は近代社会の不可欠の契機であり、国民国家は死滅することはできず、相対化され開かれた「市民国家」へと押し進められなくてはならない。いまグローバリズムに象徴される世界資本主義のありようをどの方向に押し進めるかについて、もはや単なる“批判主義”は知識人の知的な趣味になったというのが僕の判断なのです。

加藤 どうもありがとうございました。では最後に皆さんから、一言ずついただければと思います。

橋爪 加藤さんも何か、司会としてではなくてお話しされた方がいいような気がするんですが。

#### 「引くこと」と「加えること」

加藤 司会が最初にだいたいの時間を取ってしまいましたので、何か時間節約にせかされる思いで、発言に対する萎縮感が生じているのですが、ご指名をいただいたので、最初に僕からあげた質問に僕もまた答えるつもりで、簡単に言ってみます。

まず、全体の感想から。

シンポジウムに先立ち、見田さんの『現代社会の理論』を読み返したのですが、資本制のシステムが、大きく言うとミミズの逆、逆ミミズというイメージでやってきました。ミミズというのは痩せた土を食べてお尻から食べたものを出すと、土が豊かになっている、そういう生き物です。これをシステムとして見ると、無機物を摂取して体外に出すとこれが有機物に変わっている。ところが資本制システムというのはその逆ですね。有機物が資本制システムに摂取され、その体外に排出されると、無機物になっている。そういうシステムが大々的に駆動した結果、矛盾が困じ、いろいろな問題が出てきた。その挙げ句にこの9・11があるという、大きい見取り図が浮かびました。

僕の答えは、この逆ミミズに対しては、その逆ミミズを世界から取り去るわけにはいかない、というものです。そうである以上、ここにこの過程をさらに再逆転する、逆・逆ミミズを投げ込む、あるいはその逆ミミズに対しこの過程を反転させる何らかの作用を加える。それ以外にない。つまり、ここから何かを引くのではない。引くことは不可能だ。そこに何かを加えて、問題を解決する、というものです。今日、そんな思いで、皆さんの話を聞いてきました。

#### 9・11の画期性

皆さんに僕のほうから出した論点は、3つです。

まず、今回の9・11という出来事は、どのような意味で画期的な意味をもつか。僕には、この出来事は、国家を単位とした国際社会という近代の世界構造が壊れたことの最初の現れ、と見えます。先に第1部で「世界心情」と言い、内部と外部が裏返った、というようなことを言いましたが、これはそのことをさしています。



9・11 もまた、それほど大した出来事ではなかったということになるのではないか、という竹内さんのいわば「冷水を浴びせかける」ような挨拶から、このシンポジウムははじまったわけですが、この重要な問いかけに僕もまた答えるとする、僕がこれまでになかったものとして心中深く印象づけられたのは、あの世界貿易センタービルの崩壊の映像、それがもつことになった新しい性格です。

1960年代末に、人類がはじめて月に降り立ちました。アポロ11号です。アメリカがそれを実現し、その映像は全世界に流れました。僕もそれを見ています。でも、これを見て、人類がはじめて月に立った、その月から見た地球は青く美しい、と思ったとしても、この映像を世界中の誰もが、いわば人類の一員として、「わがこと」として見たかということ、たとえば、アフリカにいる誰か、第三世界の国々の——つまり貧しい国の貧しい層に属する——誰かは、その映像を目にしても、「俺には関係ないや」と感じたのではないかと思うのです。それは、僕がそう空想する、想像するということです。「人類」という概念が、いわば先進国のほうから人間全体へと投げかけられた投網であることを、それは示していると思います。

しかし、世界貿易センタービル崩壊の映像は、貧しい国の人々が心中ひそかに喝采して、これを見たということが言われますが、言われたというだけでなく、僕にはそれは、やはりそうだろうと思われる。それは、先進国の豊かな国の豊かな層の人々には恐怖の念を植え付け、第三世界の貧しい国の貧しい層の人々には、別の意味——喝采からかすかな関心までの——を帯びて、でもやはり「わがこと」——自分と関係のある世界の映像——として、見られたのではないのでしょうか。むしろ、これをまた「無関係」と見る人々が存在しているかもしれないことは否定できないのですが、これまで、これほどに世界中のほぼ全員によって、「わがこと」として見られた映像は、なかったと、これまた僕が、思うのです。

それは、僕の考えでは、世界が1つになったことを表しています。世界が1つの内部になったこ

とを示しています。見田さんは、顔の見える社会集合を交響圏、顔の见えない社会集合をルール圏と名づけました。そこでは交響圏の上限が100人と(たまたま)書かれています。この出来事の後、『世界がもし100人の村だったら』という話がインターネット上で広まったのは、示唆的な事実です。9・11は、世界を、ある意味での、交響圏といったものに変えた、交響圏とルール圏の関係を反転させてみせたのでは、ないでしょうか。

自分からより遠い存在のアフガニスタンの民衆が、内在的「心情」の対象となり、自分からより近い存在世界貿易センタービルの犠牲者が、関係的「考察」の対象として現れてくること、どういう意味をもっているのか。まだよくわからないところもあるのですが、そういう自分の内部の出来事に照らして、僕は、この出来事は、世界のあり方を変えたと思います。

#### 「社会」と「国家」と「世界」

また、第2の国家と社会ということと言うと、僕が国家と社会という二項が面白いと感じたのは、たとえば橋爪さんの『言語派社会学の原理』や宮台さんの『サイファ 覚醒せよ』などに出てくる「状況環」だとか「サイファ」といった概念に「社会」と「国家」と「世界」について考える上で新しい考え方が現れているのを見て、刺激を受けたということに加え、国家を単位にすると、世界は——国際社会というように——外部的な存在と見え、構造と見え、システムとして見え、外部問題と見えてくるのに、社会を単位にすると、いまや、世界は——「世界心情」の器というように——内部的な存在と見え、人間の問題と見え、内部問題と見えてくる。そのような社会と国家の新しい対位関係が、9・11以降、生じるようになったのではないかと考えるからです。

世界の問題を考えるには、もう国家単位に、これをシステムとして外部存在として見ていくだけではダメなのではないか。そうではなく、一個の内部として、見る見方を併せ持たないと、この新しい世界は、捉えられないのではないかと。そう考えて、はじめて、打開の道は、現にある国民国家

と資本制のシステムを前提に、追尋するしかないということの現実性が、見えてくるのではないかと思います。昼の休み時間に、元気のよい若い聴衆が、見田さんの発表を評してあれじゃ「見田文学」じゃないのかと鋭い揶揄を交わしているのを耳にしました(笑)。しかし、僕は、そういう理由で、見田さんの僕なりに受けとめて「文学的」な見方を、新しいと感じます。

本当は、橋爪さんと宮台さんにも、こうした「状況環」「サイファ」といった概念に立った国家と社会の関係、社会と世界の関係の新しい現れなどについて、どちらかと言えば内部問題的なお話を伺いたかったのですが、それは別の機会に譲りたいと思います。

#### どう閉塞は打開されるか

最後に、では、逆ミミズが駆動され、世界が1つになり、それこそ宮台さんの言う「外部」をもたないシステムになることで、1つの閉塞状況が現れている。「絶望」「怨念」「監視」といった状況が現れている。それを打開する方途として、お前はどのような答えを用意しているのか、と問われたら、どう答えるか。

ここに何を加えるか。

テロはけっしてなくなならない、だからプラグマティックな実践を通じて、少しずつ減らすことが大事だと橋爪さんは言われました。これに対し、それはそれで、同感だが、そのためにも原理が大事だと、竹台さんは答えたのですが、僕は、テロを少しずつ減らすためにこそ、こうすればテロは根絶できるはずだという指針が、なくてはならないだろうと思います。ですから、テロを減らすことが、テロ根絶の方途を考えることと、「あれかこれか」の二者択一の関係に置かれるとは考えません。いずれにせよ、どうすればテロは生じなくなるかと考えることを避けて通ることはできない、という見田さんの説に同意します。

根絶の方途については、竹台さんと見田さんからそれぞれの考えが示されています。教えられるところ大で、同感なのですが、僕は、どこまでもこの出来事によって現れた新しい条件、1人無知

のままここにいても、そこで感じられることが、世界の問題につながる、という足場を、こういう問題を考える際に、1つの方法にしたい、ということをそこに付け加えたいと思います。

見田さんのお話には、アメリカはどんなに軍備を整えても、核による自爆テロの悪夢から逃れられないだろうとありました。聞いていて、1人のテロリストが、1つの都市を消滅させるだけの威力をもつ原爆をスーツケースに入れ、遠くない将来、アメリカの空港に降り立つ悪夢の映像を思い浮かべました。いまや国家と国家の関係が世界を構成するのではなく、1人と世界との関係が世界を構成するまでになった。このことの意味は何でしょうか。「世界心情」の成立という契機に、1人の人間が、自分のいまいる場所から、何も知らないということを手応えとし、手がかりとして、世界の認識にまでいたるみちすじが確保されたのではないか、という「文学的」な感慨をこめておこうと思います。

それでは、皆さんからも最後に一言。今度は宮台さんからお願いします。

#### R・ローティをどう評価するか

宮台 竹台さんに質問というか、オブジェクション(異論)があります。やっぱり現代思想の歴史を無視しているような気がいたします。であるがゆえに、ローティに対する評価が低いのではないのでしょうか。例えば、セクシャル・マイノリティーズによる思考の歴史を参照していただきたいんですね。第1期フェミニズムにおいては、リベラリズム的な主張が主流だったわけですが、しかし1人1票のルール社会に我々も参加させてもらったにもかかわらず、人々の感受性が変わらないがゆえに、例えば表現の自由の貫徹の下で、男が家に帰るとみんな強姦痴漢妄想でマスターベーションしていたりする、うわ、こわー、みたいな。彼女たちはこうした状況こそが暴力だと言っている。したがってリベラリズムだけでは、つまり1人1票のルール社会が実現したぐらいのことでは、最終的には自分たちの目標は実現しないことがわかったと言うわけです。

そこから先、セクシャル・マイノリティーズやゲイ・スタディーズの一部は、短絡的にリベラリズムの拒否、近代の拒否、ポストモダニズムという方向に行く。とは言うものの、キャサリン・マッキノンやのアンドレア・ドウォーキンが、リベラル・デモクラシーの内部では自分たちの幸せはやってこないと言うとき、皮肉にもアメリカのリベラル・デモクラシーに対する盤石の信頼がありました。つまり、近代のベースに対する盤石の信頼があったがゆえに、近代だけではどうにもならないというポストモダニズムの主張に、文脈的な意味が与えられたのでしょうか。

しかし今はどうでしょうか。まず日本には近代のベースがあるのでしょうか。そういう自国に対する反省的な認識を欠いた愚かな日本人がポストモダニズムを主張するという愚劣なゲームを、私たちは目にしなかったのでしょうか。あるいは昨今のアメリカでは、先程申し上げましたアメリカ憲法学会の180度の路線転換などによりまして、リベラル・デモクラシーに対する盤石の信頼なるものは、急速にスポイルされつつあります。こういうときにリベラル・デモクラシーを否定する思想を語ることに、どういう文脈的な意味があるのでしょうか。ローティはまさにそういう状況、すなわち90年代的というか冷戦体制終焉後の状況に対応して、皮肉屋、野師、ベテン師としてみずからを規定しながら、議論を始めたのではなかったか。

要はリベラル・デモクラシーしかないんですよ。これを放棄したらすべて終わるんです。しかしその下では幸せになれない人間たちが大勢いるということです。だとすれば実践しかない。リベラル・デモクラシーの下で人々が現にどう振る舞うかを、リベラル・デモクラシーは規定できないんですよ。これは大事なことです。リベラル・デモクラシーの下で人々がどう振る舞うかをリベラル・デモクラシーは規定できない。だから、さっき感情教育というのもその1つとして挙げましたが、そうした実践によって、ああ、リベラル・デモクラシーによって抑圧される人間があまりいなくなったとか、リベラリズムの外部がどんどん

小さくなっていくんだなと思えるような状態にするしかないというのが、ローティの思想です。

1人1票のルール主義によって問題が解決しないのは、僕が毎月行っている沖縄に行けばよくわかります。沖縄は今、1人1票のルール主義によって、戦後最大の自公保翼賛路線をばく進中です。日本本土が沈みつつあるので、緊急にコンクリートと金を沖縄にぶち込んでくれというスキームになっています。石垣島なんかは3割が土建業関連に従事します。その結果、途中で行き止まりになった道路、全くいらぬ護岸、全くいらぬダム、全くいらぬ空港がどんどん造られている。これが1人1票のルール主義の結果です。

以前からレイチェル・カーソンやスーザン・ジョージが問題にしていたように、1人1票のルール主義の下で、自分たちが食えるようになりたい、幸せになりたと思って、人々がその1票を行使することで、例えば「沖縄にコンクリートぶち込んでくれよ、珊瑚礁なんかどうでもいいからさ」という方向に社会が動いてしまうのが現実です。これをどうするのかという処方箋は、リベラル・デモクラシーの貫徹の中にはありません。その問題を強調させていただきます。

加藤 この答えは竹田さんの発言の際にお願いします。では、橋爪さん――

#### ジャパニーズ・スタンダードの可能性

橋爪 竹田さんの、国際社会が1人1票のルール主義の社会と相似なのかどうかという論点について考えてみます。

国際社会でいま進行中のグローバルイゼーションは、いくつか要素がありますが、アメリカのスタンダードを広めるということと、市場経済ですね。少しやってみてわかるのは、テクノロジーギャップがあるわけです。今まで何百年か資本主義をやってきたところには、膨大な情報や資本が蓄積されていて、それが生産財になっているわけだから、ゲームのうえでは非常に有利で、ますます富が集積する。この市場経済の中でどんどんやっていって、はたしてそのうち第三世界が浮上する

のかどうかは、よくわからないんですね。あまり展望がない。

いろいろな考え方があるんですけど、ひとつは再分配してしまえばいいんじゃないか。これは共産主義に代表されるんですけど、これはだめだった。そうすると、もう方法がないわけです。そこで市場経済に、例えばODAとか、再配分の要素をいくつか組み込んで、あまり不安が表面化しないように取りあえずやっているというのが現状だと思います。市場経済がこれからどういうふうになるかということに、大きく依存するんです。市場経済を運用する能力にも依存するんですね。

仮にこれが、100年、200年で平準化するのだとしましょう。人間というのはバカじゃないから、いい場所があればどんどん移動していく。新大陸と旧大陸の区別がなくなって、昔旧大陸がかなり均等に住まれていたみたいに、新大陸と旧大陸が均等に住まれるようになれば、アメリカの優位もなくなって、そういう不公平の問題は解決する。これまで待てるかという問題です。

待てないという考え方がたぶん出てくると、私は思う。それはいくつか理由があるんですけど、世界中がアメリカになるわけにはいかない。アメリカは、世界中の人は来ないでくれ、俺たちはアメリカのままいたいんだという、そういう個別利害を持っているわけですから、むしろ不平等を再生産しようとするだろう。

そこで日本のスタンスということですけど、日本は旧大陸に属している。日本はアメリカ化したけれども、スペクトルのうえではまだ、発展途上国や第三世界に近い。つまり、資源効率が高くて、貧乏の記憶を持っているという社会です。

アメリカン・スタンダードじゃなくて、ジャパニーズ・スタンダードというものをもし発明できれば、資源効率は倍になって、日本並みの先進国になれる人たちは、アメリカ並みの先進国になれる人たちの少なくとも倍になるだろう。こういうメリットが日本にはあるわけです。アメリカにはアメリカであるというメリットはあるが、日本にはアメリカでないというメリットがある。この戦略的意味をよく自覚して、情報をうみ出すという

のが、竹田さんの1人1票に加えて、私の提案なんですね。

加藤 竹田さんお願いします。

#### 法のリベラリズム的位相

竹田 はい。社会学者と哲学者の感度の違いというのがあって、おそらく具体的な事実を見ながら考えを作りあげる社会学者から見れば、哲学者の言うような悠長なことを聞いていても、今起こっているアクチュアルな問題にほとんど対処できないし、実効性がないじゃないか、という感覚かなと理解します。僕のほうは、橋爪さんや宮台さんが指摘されたような具体的な場面まではとても考えられないし、いろいろ参考になることも多いのです。しかし、2つのことを言いたいと思います。1つは、基本的にはというか、大きな立場としてはわれわれの間にはむしろ大きな対立はないらしいということです。しかしだからそれでいいということではない。僕の自覚的な立場はリベラリズムであり、リベラル・デモクラシー以外の選択肢はないというところにある。その点に関するかぎり、むしろ立場は近いかも知れない。しかし、その先が違ってくように思います。宮台さんの感覚は、リベラルの立場はそれでいいかもしれないけれど、それだけではもう先に進めない、そこに何か具体的なプランが付加されなければいけない、ということだと思います。そのことについての僕の考えの基本は、このプランの原則は、意志や心意として他者を認めること(相互承認)ではなく、それを制度として構成することではないということ。ひとことで言うと、宗教は他者の承認を心意として内面化することであり、道徳(倫理)は意志として内面化することです。法はそれを“制度化”するのです。法による承認は、なんだか即物的なような冷淡な合理的にすぎような気がするかも知れない。また、法という制度は、深い相互承認、自由な人間としての相互理解や、同情や人間的共感といったものを配慮しないとダメです。しかし法だけが、そのような自由な人間関係を育てる社会関係を確保できるものです。



法制度がいちばん大事だと言いたいのではなく、社会制度ということの意味について言っているわけです。そしてここはたしかに1つの論点です。社会思想は、人間の実存可能性の一般条件を高めてゆくものであって、内面に関与せず、したがって優れたルールを作りあげることに関与するというのが僕の考えです。モラルの問題をルールの問題と混ぜ合わせると、社会思想は要請論に近づくからです。カントは近代社会の公共性の問題を人間の内面性に関わる原理として構想したわけですが、まさしくそこがヘーゲルの批判的となったのです。

僕の言っていることは、まずそういう原則論です。だから抽象的に聞こえる面もあると思う。しかし僕から言えば、資本主義の矛盾を解いていくための多くのプランが出てきて知的情報であふれ返る前に、考え方の原則をしっかりと打ち出しておく必要があるということになります。それが哲学の基本的役割だからです。

昔、知識人と大衆という構図がありましたが、いまはこの構図はもう死んでいる。一昔前は、知識人とは国家や制度に対する一般大衆の苦しさや不満を代弁するというのが大きな役割だった。しかしいまはそういう構図がなくなっているからです。むしろ多くの情報とさまざまな考え方やプランや理想があっただけで、これをできるだけシンプルな考え方の原理に差し戻して、普通の人々がそれを選ぶことができるような形で提示することが、いまでは学問や思想をあつかう人間の重要な役割だと思えます。このとき、批判主義はある場面では通りやすいけれど、人々に社会のあり方を自己決定させる力を殺いでしまう。あくまで考え方の原理をはっきりした社会の構想とともに示すことが重要で、あとは一般の人々がそれを選ぶということが大事なのです。

#### 「近代」と「自由」の基本理念とスパンの問題

もう1つは、もちろん具体的な諸問題について1つ1つプランを重ねていく必要があるわけですが、その前に「近代」と「自由」の基本理念についての疑念がしっかり解かれていないと、まずプ

ランが百花繚乱するということです。たとえば僕は資本主義の競争原理について、先進国間の競争ルールや、資本家の資産や、相続税や、企業の永続性に関して、いくつかのプランをもっている。現在の資本主義ルールは明らかに不合理で制御すべき理由とその正当性をもっていると考えるからです。しかし、そういうプランは、まず先進国間で一定の競争ルールを設定していくための条件を、比較的長いスパンで構想しなくてはいけない。でもそういうことの大前提に、ヨーロッパ近代や資本主義や自由主義やリベラリズムなどの基本原則や理念について、合意どころか、さまざまな疑念や不安や反感が渦巻いているのが現状です。そうすると、さまざまなプラン自体が一種の“立場性”を帯びてくる。こうなるともうどんな議論どこにも行きつかない。哲学の立場からは、そういう順序が最も大きな問題になるわけです。だから、近代哲学をもう一度総ざらえして、現代思想の大きな枠組みに対置する仕事が必要になっている。この順序をどう考えるか、どう対処するかという点について、哲学者と社会学者の間で意見と感度の違いがたしかにあると思えます。しかし、大きくはそれは、スパンの問題ということかもしれない。なにせ近代哲学はホブズからヘーゲルまでおよそ200年の原理思考のリレーがあっただけで、近代社会の基本理念を構想してきたわけですから。具体的なものを実証的にみることをはじめの土台とする立場からはあまりに悠長に見えるかもしれませんが、哲学という言語ゲームでは、そうして大きな枠組みを作りながら進むことが基本ルールですから。

加藤 どうもありがとうございました。では最後に見田さん、お願いします。

#### 「不満の代弁」から「世界の構想」へ

見田 竹田さんの今、おっしゃったことを受けて言うと、最後の近くでおっしゃったことには非常に賛成というか大事なことだと思います。昔はいわば、社会の不満を代弁するみたいなことが知識人だといわれていたけど、そうじゃなくて、大事

なことは世界を構想することなんだと。どういうふうにしたらいい世界ができるんだということ、構想することが大事なんだということは、今日の討論の中で、あまり目立たなかったけれど大事なこととして確認しておきたいと思えます。

今日の討論だけじゃなくて、9月11日のテロやその後の状況が、まさにそういうことを示しているのではないのでしょうか。社会の不満に目をつぶって論を立ててはいけませんが、社会の不満をきちんと理解して世界認識の基底におさえた上で、どういうふうな社会にしたらそういうことはなくなるのか、ということ正面から考えない

とだめだという、つまり「不満の代弁」よりも「世界の構想」なのだということは、大事なポイントとして取り出しておきたいと思えます。

そのうえでの世界構想に関しては、もちろんいくつか言いたいことはあって、僕が話の最後のところでご紹介した、ローレンスの語っていたような、それ自体としてはとても納得されないかもしれないような構想ともどう関わっているのか、という問題を含めて、いろいろと議論すべき事柄があるんですけど、それはまた、話し出すと長くなるのでこのあたりでやめておくことにします。

## 第3部 会場との質疑

加藤 では、会場からの質問に移ります。質問のある方は手をあげてください。誰に対する質問かということもおっしゃって下さい。

質問1—神山 神山睦美と申します。質問、どうかお聞きしたいことなのですが、見田さんがローレンスの『アポカリプス』にふれて「不遇性」というテーマを出されてきたのは、画期的なことだったと思います。僕の質問は、吉本さんの「関係の絶対性」のところから見田さんは「不遇性」の問題をローレンスとつなげてお話されていたのですが、吉本さんの論とローレンスの考えは同レベルではないんじゃないかな、ということです。「関係の絶対性」というのは、「不遇性」の問題をローレンスの『アポカリプス』的な方向では解決しないという解き方ではないかと理解しているのです。ですから、「関係の絶対性」から「自立」へ、というような問題の立て方もある程度納得できるんですけども、ここはもうすこし詰りながらやらなければならないんじゃないか。その点についてお聞きしたいと思います。

質問2—久保田 久保田と申します。見田さんに2つ質問があります。1つは、『現代社会の理論』の中で、情報化によって、外部収奪的でない自立した社会が出てくる可能性があるんじゃないかということを書かれていまして、私自身もコンピューターが普及したときにそういうふうなことを考えてみたこともあるんですけども、インターネットがグローバル化を補足しているというか、アメリカを豊かにしているという面もあると思うので、その点をどのように考えておられるのかをお聞きしたい。もう1つは、さきほど見田さんが途中まで言いかけてやめられた、これか

らの「世界構想」ということについて、お聞きしたい。その2つです。

質問3—ヤスモト〔ヨシモト?〕 ヤスモト(ヨシモト)と申します。年金生活者です。橋爪さんに質問です。南北問題が構造的にテロを生み出すような状況があるときに、これを暴力によらず、説得によって解決していく道はどのように見出されるのでしょうか。南側の政府の課題、北側の政府の課題、政府がちゃんとしてうまくやっていくことはできないのでしょうか。その両方について橋爪さんのお考えをお聞きしたいと思います。

質問4—柴田 大学生です。橋爪さんにお聞きしたいのですが、大量生産、大量消費の文明の中で生きている1人の人間としては、テロが起きてみても、3日ぐらいすると忘れてしまうということがあるように思います。そういう人間でも、ときには南北問題に心を痛めたり、爆弾をおとされるアフガニスタンの人たちに対して心を痛めたりということもあるんです。そういうふうな人間が持続力をもって、グローバル化によって差別が拡大するのではなく、それをもっと豊かな社会を作っていくためには何が必要なのか。歴史的な、というふうに今日のお話をきいてみて思っただけですけども、こういう文明の中で生きていると、自分に歴史なんてあるのかな、というような疑問をもたざるをえなくなります。では、何からはじめたらいいのでしょうか。

質問5—氏名不詳 見田さんだけにしぼって質問します。見田さんは、哲学者や社会学者にとっては、世界の構想をいかに出していけるかが重要だといわれた。しかし、そのような哲学者や社会学

シンポジウム 9・11以後の国家と社会をめぐる

者にとってだけではなく、普通に生活をしている1人の北の人間として、南北問題に対してどういう感覚でむきあうことができるのでしょうか。わたし自身は、加藤さんがいわれた「内在」ということや、吉本隆明の、資本主義の先進国では第1次産業、第2次産業ではなく、第3次産業が新しい公害をもたらすようになっている、という指摘などが念頭にうかんでいるのですが。

質問6—鈴木 鈴木と申します。サラリーマンです。宮台さんと見田さんにお聞きしたいと思えます。テロには処方箋がない、というお話でしたが、9・11だけをみればそうかもしれませんが、いまやテロはあちこちでおきておまして、それを社会的にごらんになることはできないでしょうか。というのは、7、8年前にイスラエルにいきまして2週間ほど旅行したんですけども、圧倒的な貧富の差というものがあって、宮台さんのいう「怨念」のようなものを感じたんですけども、みなさん明るい顔をしていたんで、これは2000年つづいた対立が徐々におさまっていくんじゃないかと思って帰ってきたんです。その後、アメリカがイスラエルの軍事力行使を見ごすように変化し、その様子をみたゲリラが活動を始めたということが起こりました。アメリカ政府とゲリラと実際に追い立てられているアラブ人の3者の関係を把握するような形で、研究をすすめていただくということはどうでしょうか。

加藤 今、6人の方から質問がありましたが、まず、見田さんから答えいただきます。

見田 神山さんのご質問(質問1)で、「関係の絶対性」というものに関して、吉本がもうちょっと別の方向を考えていたのではないかということに関しては、きちんと言うと橋爪さんにも「あらっばい」と批判されましたけど、あそこでも僕は相当な荒業をやっているんで、吉本論について緻密にやろうとすると、また別の構えが必要になると思えます。これはやりたいのですが、規定の枚数とか時間の問題があり、肝腎の骨子を出してくる、

というところでやめています。そこをきっちりと跡付けていくと面白いんですけども、ただ今日の主題に関してはあのような仕方でも主題を立ててきたほうが根本的なところは明確化すると思ったわけです。

2番目の方(質問2)ですけれども、基本的にいうと自由な経済ということを生かしながらですね、資源収奪的じゃない生き方を構想するということの可能性が情報化ということによって生まれてきたと思うんです。しかし逆に悪くなる可能性も生まれてきた。ですから情報化は両方の可能性を生み出してきたわけです。情報化ということを経営にすることで、自由な社会のままに資源収奪的でない生き方を構想するという可能性があるということは、非常に大事な点じゃないかと思えます。それから、これからの世界の構想ですが、5番目の方がおっしゃって下さった、豊かな社会の中にもある内在的な問題ともどう関わるか、ということ(質問5)とも関わってきます。実はさっきメモして、そういうことが出てくると嬉しいなと思っていたので、話したいんですが、どうしても長くなるんですよ(拍手)、拍手して下さった方々のことばかり考えていると、黙っているけど怨恨が、という(笑)……ことになるので。それは、もう少しゆっくりと話せる機会にまわしたいと思います。

加藤 6番目の鈴木さんは宮台さんと見田さんへ、ということだったと思うんですが、よろしいですか。ではそれは宮台さんに答えていただくことにして、次に橋爪さんにお答えをお願いします。

橋爪 2つ質問が寄せられたんですけども、最初ヤスモト(ヨシモト)さん(質問3)から南北問題を解決するのに、第三世界の現地の政府をよくしてちゃんとやるようにと指摘がありました。

ちゃんとやるようにといっても無理だと思えます。

政府にもいろいろあって、グローバル化も悪いことばかりじゃなくて、中国とインドが産業化に成功しつつあるというのは大変希望が



もてる。よいことなわけです。中国で13億、インドでかれこれ9億くらいの人口がいますので、かなりの人間たちが産業化の希望にのって来た。その政府は両方ともかなりうまくやっています。国内格差はありますが、国内問題ですから、通常の近代国家の手続きで対処できる方法もあるわけです。国際社会になると、国際的な資源もうまくやって、現地の政府もがんばるという二段階が必要です。しかし現地の政府というのは、ほとんど暴力団かなんか、そういう素質の悪い団体で、いわば社会が解体しているというような状態でまったく手をつけられない、というのが第三世界のかなりのところの実態なんですね。もしなんとかするんだったら、占領するしかない。占領するというのはつまり、植民地にすることでしょう。もう1回そこに戻ろうというわけにはいかないわけです。まあ、いくかもしれないけども、それはそれでまた問題がある。実際にどうすればいいのか、希望もあるけど、非常に困難な問題であると認識しています。

もう1人柴田さんから質問があったんですけども（質問4）、先進国の若者はテロがあっても3日で忘れる。いったいどうすればいいのかという質問でした。

意識を高めるという運動がいろいろありますけど、私は、意識を高めなくてもなんとかなるというシステムでなければたぶんうまくいかないと思うんですね。意識を高めなくてもうまくいくのは、たとえばマーケットメカニズムです。私は炭素税の導入を主張しているのですが、これなら意識を高める必要がない。先進国が合意して、化石燃料から出る炭酸ガスの排出に対して懲罰的な税金をかけるというのが炭素税ですけども、アメリカが反対している。この税が採用されれば、価格体系が炭素を使っている製品に関して高くなりますから、テロのことを忘れようが、毎日の消費の中でそういう方向への変化が起こるわけです。専門家がよく議論して国民の支持のもとにそういうメカニズムを各国で作出すというのが一番確実な方法だと思う。それを国民が支持できるためには、情報も哲学も歴史も理念も、そして必要なら

行動も備わっていかなければならない。先進国の若者の倫理といえ、そういう状況をよく理解して勉強していただくということですね。お説教になってしまいましたが（笑）。

加藤 宮台さんお願いします。

宮台 橋爪さんが最後におっしゃったことは4番目の質問に関することですけど、実は竹田さんもさきほどおっしゃっていました。「倫理的にふるまえ」と言うことは誰でもできる。けれども、重要なのは、エゴイズムにもとづく行動が、結果的に利他的ないし公共的な帰結を生み出すようなメカニズムです。そうしたアーキテクチャを作り出したり、設計したりすることが重要になります。幸いにして先進各国の若い人たちは、あまり幸せでない連中が多くなってきました。僕は相変わらず出会い系を調べていますけれど、自由にみえる世代ほど不全感が大きくなってきているという逆説的な時代です。社会学はずいぶん前から予想してきたことですが、そのことがますます目に見えるようになってきました。僕は「入れ替え可能性の問題」というふうに言ってますけど、要するに機能主義のなれの果てですね。便利な場所はどこにでもある。便利な場所を望む人間もどこにでもいる。かわいい人間はゴマンといる。頭がよくて頼り甲斐のある人間もゴマンといる。——こういう入れ替え可能性の問題を何とかしたいという動機づけそのものを、実は晩期資本主義のシステム自体が生産しています。これがさきほど申し上げました新しい社会運動ということだと思えます。これは「倫理的であれ」というばかげた要求とは違って、現実に利用可能な、システム自身が生み出す理想像であると僕は考えています。こういう社会政策論的なまなざしは、「大所高所からエラそうに言いやがって」というふうにみえます。けれども、人々がそこにエゴイスティックに振る舞っても公共性に資する帰結が生み出されるようなアーキテクチャをどうつくるのか、ということに意識を集中しながらコミュニケーションをつづけたら、さまざまな公共的な政策を立案し、提案して

いくことが、求められているですね。

最後のご質問（質問6）なんですけれども、実際には、ロシアのモスクワ劇場占拠事件での強行突破には、おそらくアメリカの事前の承認がある。なぜかという、アメリカからすると、イラク攻撃をめぐるロシアとの取り引きがあるからです。外交というのは利害損得の駆け引きです。国際関係はつねにそのように動いている。「かわいそう」というような感情的な動機が、ベースにあってもかまわないですが、どうしても左脳的な計算が必要になってきます。われわれは、石原莞爾的に行えば、日露戦争以降、こうした外交能力、知恵を失ってしまいました。15年戦争に際してもそうだし、最近でいえばワールドカップの誘致をめぐって知恵のなさを露呈してしまっている。言いたいことを言うだけではダメなわけです。

加藤 竹田さんからいかがでしょうか。

竹田 ではひと言だけ。僕がいまもっている印象は、いま世界のあり方がきわめて危機的な状況で、これから世界がどうなるのか、どうすればいいのかについて、不透明感が圧倒的に強い、ということです。でいろいろ議論があって、かなりすれ違っているようなところもあったんですが、ひとつだけ言うと、この場面では、ある意味で大きな了解点があったような気がします。それは現在の資本主義というか、というよりむしろ自由経済の体制自体を根本的に否定することはできないという方向です。その先の展望について、まだそれぞれのモチーフが少しずつ出てきただけで、具体的なイメージもその違いもそれほどはっきりしなかった。僕の感じでは、ここの場ではいま言ったような一定の了解事項が流れている。しかし、じつは時代全体としては、そうではなくもっと混沌としている。思想としての「社会主義」はほとんど見えなくなっているけれど、しかし「資本主義」の根本的克服こそ決定的な課題だと考えている人もいるし、なんらかの仕方で「国家」の解体を模索すべきだという考え、近代やヨーロッパ的原理自

体を疑問視しなければならないという意見も強い。共同体的な観点から民主主義的原理を批判する考えもある。簡単にいって、右から左まで色とりどりあるわけです。

僕の考えは、はじめに言いましたが、「自由経済」「民主主義」「近代国家」（市民国家）という基本線を認める以外の場所に世界の展望は決していない、この社会原理しか現在の国家間対立や資本主義の根本矛盾を克服する考えを取り出すことはできない、ということです。それが僕がずっと近代哲学と現代思想をやってきたとどりに着いた場所です。もちろんそれはすぐ実証できないし、まだ大した説得力をもった仕事できていない。ただ、1つ言っておきたいのは、どの方向に原理があるのかについて、いまはバラバラでまったく合意が存在しない状態だということです。そしてまだ少し時間がかかるけれど、この基礎的な方向についての合意が形成されるなら、そのことが決定的な動力になるということです。それがどんなものであれ、この大きな基本合意が現れないとどんな努力も打ち消されあって結局何1つ進まない。いわば世界宗教解体して、個別宗派や個別救済思想がたくさんでてくるというような状態になる。ですから僕の現在の感度は、いろんな具体的プランの前に、この点の合意を作り出すためにいまどういう仕事が必要なのか、ということです。それで「近代」以降出てきた社会原理を徹底的に構成しなおすというのが1つの課題で、もう1つは近代のイデオロギー論です。時間がかかりますが、少しずつやるしかありません。

加藤 どうもありがとうございました。

（本シンポジウムは、明治学院大学国際学部付属研究所主催で2002年11月2日、明治学院大学白金校舎3201番教室で開催された。その要約版の記録は『論座』2003年1月号に掲載された。それと別に、テープ起こし稿より再構成した完全版が本稿である。ご協力いただいた朝日新聞社『論座』編集部に感謝申し上げます。）